

にしうらいせき
西浦遺跡

一市道上郷 35 号線・483 号線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

2021 年 3 月

長野県飯田市教育委員会



SX031 出土古墳時代遺物

序

私たちが暮らす飯田市は、河川や断層が形成した段丘と、山麓から緩やかに広がる扇状地が見事に調和した風光明媚の地です。この地は古くから交通の結節点として栄え、他地域の影響を受けながらも独自の歴史や文化を育んできました。

飯田市には数多くの遺跡や古墳が分布しています。それは、この地が古くから栄え、多くの営みがあった証拠です。これらは地中に保存しておくことが最も望ましいといえますが、現代に生きる人々の生活を考えると、残念ながらすべてを残すことにはかないません。その場合は開発の前に発掘調査を行い、詳細な記録を残すことで遺跡の情報を保存する作業が必要です。

このたび、上郷地区の「西浦遺跡」において、リニア中央新幹線長野県駅に隣接する地区の整備事業として市道の改良事業が計画されたことにより、令和元年度に埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。今回の調査では、弥生時代や平安時代の建物やお墓が見つかり、集落として長きにわたって栄えたことがわかりました。さらに、半世紀以上前の郷土史に記載されているものの、正確な場所がわからなくなっていた古墳の一部が再発見され、当時の有力者が所有していた馬具や装身具、お供えに使われたやきものなど、多数の遺物が出土しました。これらは報道機関にも取り上げられ、注目を集めました。以上のような成果から、今回の発掘調査は、地域の歴史を語るうえで貴重な成果となったことは疑いありません。本書はその調査結果を記録するために作成した報告書です。この報告書が多くの方々の目に留まり、活用されることを切に願います。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました東海旅客鉄道株式会社の関係者のみなさま、並びに本調査・報告書刊行のご指導をいただいたみなさまに、深く感謝申し上げます。

令和3年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田 昭久

例　　言

- 1 本報告書は、飯田市リニア推進部が計画した市道上郷 35 号線および同 483 号線改良・新設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地 西浦遺跡 の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査対象地は長野県飯田市上郷飯沼 2759 番 1、同 2765 番 1、同 2766 番 1、同 2785 番 1、同 2761 番 3 に所在する。トレンチ調査を実施した地点は、同 2748 番 3(トレンチ 1)、同 2768 番 1(トレンチ 2)、同 2758 番 1(トレンチ 3) である。
- 3 本件は令和元年度(2019 年度)に発掘調査を実施し、令和 2 年度(2020 年度)に整理及び報告書を刊行した。
- 4 調査略号は NSU2759-1 を用いた。
- 5 発掘調査は飯田市リニア推進部から委託を受け、飯田市教育委員会が直営で実施した。調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 代田 昭久
調査担当者	春日 宇光
作業員	伊東 裕子 今村 文一 木下 由紀子 関島 真由美 竹本 常子
	橋本 宣子 中田 恵 中村 地香子 中山 美保 久田 誠
	福澤 育子 三木 美保 宮内 真理子 森藤 美知子 森山 律子
	横前 正富 吉川 悅子

(2) 事務局体制

【令和元年度】

飯田市教育委員会

教育次長	今村 和男
生涯学習・スポーツ課長	北澤 俊規
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	羽生 俊郎 村山 博則 春日 宇光 佐々木 佑里香 福井 優希 山下 誠一

【令和 2 年度】

飯田市教育委員会

教育次長	今村 和男
地域人育成担当参事兼生涯学習・スポーツ課長	青木 純
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課長補佐兼文化財担当主幹	宮澤 貴子
生涯学習・スポーツ課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	澁谷 恵美子 村山 博則 春日 宇光 佐々木 佑里香

- (3) 指導・協力
長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課
- 6 本件に伴う業務委託は、以下のとおりである。
基準点測量・地形測量・標高析出：株式会社小林コンサルタント
金属遺物保存処理：公益財団法人山梨文化財研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト
- 7 本報告書は春日宇光が執筆・編集し、馬場保之が総括した。付編については公益財団法人山梨文化財研究所の三浦麻衣子研究員に執筆を依頼した。
- 8 整理報告にあたり、下記の諸氏にご指導・ご助言をいただいた。ここに記載のうえ感謝申し上げる。
(敬称略・五十音順)
石丸 敦史 内山 敏行 児玉 利一 鈴木 敏則 中里 信之 中嶋 郁夫
畠 大介 平林 大樹 三浦 悠葵 宮代 栄一 山下 誠一
- 9 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館（飯田市上川路 1004 番）で保管している。

凡　　例

- 1 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』 p242 「表 9 遺構記号」に基づき以下の略号を用いた。

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
竪穴建物	SI	土坑	SK	性格不明遺構	SX
掘立柱建物	SB	溝	SD	小穴(ピット)	SP
周溝墓	SZ				

- 2 遺構・遺物図版で共通して使用する記号等は、以下のとおりである。
S: 岩石 P: 土器 遺物の出土位置：● 焼土の範囲： 炭化物の範囲：
竪穴建物の貼床の範囲： 金銅板の範囲(金属遺物)：
- 3 土器の実測図について、断面の白抜きは土師器・弥生土器・縄文土器・陶磁器を、黒塗りは須恵器を、アミカケは灰釉陶器を表す。石器・鉄器については個別に例示のない限り、断面を白抜きとした。
- 4 各遺構の図面において、遺物出土状況図および土層断面図等に表示した数字は、図版の遺物番号と対応し、該当する番号の遺物が出土した位置や状況を示す。
- 5 土層観察については小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。本報告図版上の記載も上記文献に準拠したうえで、土層番号、土色の略号表記(色相・明度/彩度)、土性の略号表記の順に示した。これに統けて調査担当者の観察に基づく土層の粘性の有無、しまりの強弱を表示した。

目 次

口絵

序

例言

凡例

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査にいたる経緯	1
第 2 節 発掘作業及び整理等作業の経過	1
第 3 節 調査の方法	2
第 2 章 遺跡の位置と環境	6
第 1 節 地理的環境	6
第 2 節 歴史的環境	9
第 3 節 調査位置と周辺の調査履歴	9
第 3 章 調査の成果	12
第 1 節 基本層序	12
第 2 節 成果の概要	12
第 3 節 遺構	15
第 4 節 遺物	39
第 4 章 総括	50
第 1 節 大型遺構 SX031 について	50
第 2 節 西浦遺跡の特徴と変遷	53
付編 西浦遺跡から出土した雲珠の科学分析について	56
写真図版	

挿図目次

第1図	道路等計画概略図	2
第2図	調査区区画方法概略図	5
第3図	西浦遺跡段丘端部地層	6
第4図	調査位置図(1)	7
第5図	調査位置図(2)	7
第6図	周辺遺跡分布図	8
第7図	調査位置詳細図	8
第8図	調査区略図	11
第9図	基本層序	11
第10図	遺構分布図	13・14
第11図	竪穴建物SI001	16
第12図	竪穴建物SI002	17
第13図	竪穴建物SI003	18
第14図	掘立柱建物SB104	19
第15図	大型遺構SX031	20
第16図	SX031 遺物等検出状況	21
第17図	SX031 須恵器甕出土状況	22
第18図	周溝墓SZ100	23
第19図	周溝墓SZ102	24
第20図	周溝墓SZ101・SZ103・SZ089・SZ094	25
第21図	溝(1)	27
第22図	溝(2)	28
第23図	土坑(1)	30
第24図	土坑(2)	31
第25図	性格不明遺構(1)	33
第26図	性格不明遺構(2)	34
第27図	小穴(1)	35
第28図	小穴(2)	36
第29図	小穴(3)	37
第30図	小穴(4)	37
第31図	小穴(5)	38
第32図	遺物(1)	40
第33図	遺物(2)	41
第34図	遺物(3)	43
第35図	遺物(4)	44
第36図	遺物(5)	45
第37図	遺物(6)	46

第38図	下石橋愛宕塚古墳出土環状鉄地金網張製品	50
第39図	穿孔のある須恵器	51
第40図	下石橋愛宕塚古墳と飯沼塚田古墳(SX031)	51
第41図	ミカド遺跡の円形周溝墓	53

表目次

第1表	鉄錐計測表	42
第2表	土坑観察表	47
第3表	小穴観察表(1)	48
第4表	小穴観察表(2)	49
第5表	出土土器観察表	49
第6表	飯田・下伊那における円形周溝墓	53

写真図版目次

写真図版1	調査区遠景	
	調査前(1・4区付近)	
写真図版2	1区全景	
写真図版3	SI001	
	同 柱穴内土器片検出状況	
	同 建物端の小穴列	
写真図版4	SI002	
	同 カマド	
写真図版5	SI003	
	2区全景	
写真図版6	3・4区全景	
写真図版7	SX031(西から)	
写真図版8	SX031(東から)	
	同 張り出し付近	
写真図版9	SX031 巨礫検出状況	
	同 巨礫集中箇所 土層堆積状況	
写真図版10	SX031 須恵器(甕)出土状況	
	同 馬具(鞍)・須恵器(平瓶)	
	出土状況	
	同 馬具(雲珠)出土状況	

写真図版 11 SZ100・101

SZ100 (D-D')・SZ101 (A-A') 土層断面

写真図版 12 SX045 炭・焼土を含む砂土 検出状況

SX045 完掘

写真図版 13 4 区全景

写真図版 14 5 区全景

写真図版 15 SZ103

SZ094

写真図版 16 SI001 出土遺物・SX031 出土遺物 (1)

写真図版 17 SX031 出土遺物 (2)

写真図版 18 SX031 出土遺物 (3)

写真図版 19 SX031 出土遺物 (4)・SP063 出土遺物

写真図版 20 SX031 出土遺物 (5)・

SZ102・SP028・遺構外出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

リニア中央新幹線長野県駅周辺整備に係る埋蔵文化財の保護については、長野県教育委員会の指導・助言のもとで開発主体の飯田市リニア推進部と慎重な協議を行ってきた。そのなかで、長野県駅予定地西側において、既存市道の拡幅および新設とともに工事の計画が具体化した。計画地は埋蔵文化財包蔵地「西浦遺跡」に該当しており、文化財保護法第94条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知が飯田市リニア推進部より平成31年4月16日付で提出された。これをうけ、同（令和元）年5月9日付で長野県教育委員会から発出された通知により、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行う運びとなった。調査は飯田市リニア推進部の委託により飯田市教育委員会が直営で実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査委受託費の負担について両者で協議を行い、令和元年11月26日に公文書による合意に至った。その後、用地取得等を経て現地の状況が整い、発掘作業に着手した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

1 発掘作業の経過

現地での発掘作業は、令和元年12月16日から開始し、令和2年3月19日に終了した。

排土の置場が調査区内にしか確保できないため、調査区を複数に分けて折り返しながら調査を進めることとした。12月16日、重機（バックホウ）を搬入し、表土掘削を開始した。また、同日に調査区に隣接する北条遊園地にコンテナハウス、簡易テント、仮設トイレ等を設置し、現地事務所とした。市道上郷483号線新設部分から掘削に入ったところ、堅穴建物と考えられる遺構を検出したため、周囲を拡張して本調査に移行した。この調査区を1区とし、18日に委託測量業者による基準点の設置を行い、作業員による遺構掘削と記録作業を開始した。以降は調査区ごとに作業を進め、市道上郷483号線の段丘端部を2区、その内側を3区・4区、市道上郷35号線拡幅箇所東側を5区とし、調査区ごとに基準点設置を行った。本調査を進める過程で市道上郷35号線拡幅箇所西側（トレンチ1）、同南側（トレンチ2）についても遺構分布状況の確認を行ったが、埋蔵文化財が検出されなかったため、当該箇所の本調査は不要と判断した。

翌令和2年3月19日に5区の埋め戻しが完了した。同日、現地における作業の終了とともに、現場事務所を撤収した。調査後の4月下旬、北条地区の住民に対する組合回覧文書により、調査結果の周知を行った。

令和元年度中に調査に着手できなかった市道上郷484号線新設道路地点（トレンチ3）については、令和2年7月に調査を行ったが、埋蔵文化財の分布は認められなかった。これをもって本件に係る全ての現地作業を終了した。

2 整理等作業の経過

整理作業は令和2年度の1年間を委受託期間として実施することとし、令和2年4月1日付で委託者・受託者間で合意に至った。同日以後、飯田市上川路に所在する飯田市考古資料館で整理等作業を行った。作業は調査担当者の指示のもとで作業員が行い、遺物の洗浄、注記、接合・復元、遺物実測、拓本取り、原図の整理及び清書等を順次進めた。金属遺物の保存処理は、業者の選定を5

第1章 調査の概要

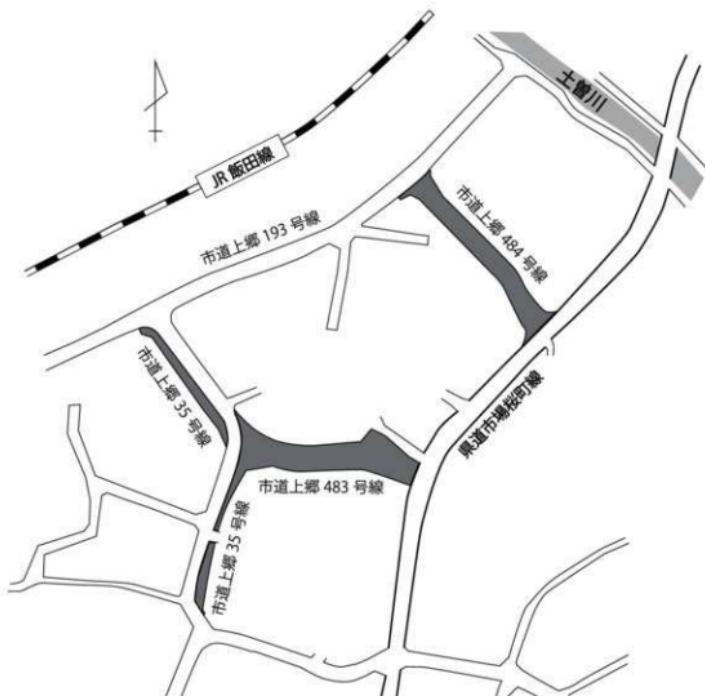
月上旬に行い、同 25 日に業者へ遺物を引き渡した。処理済みの遺物は 8 月 26 日に返却され、業者から提出された保存処理時の所見と X 線撮影写真を参考に実測を行った。遺物写真撮影は令和 3 年 1 月 19 日から 21 にかけて委託業者により実施し、2 月 4 日に写真データの納品を受けた。

報告書刊行にあたっては、調査担当者が委受託期間中に原稿の執筆、写真図版の作成を行った。印刷業者の選定を令和 3 年 2 月に行い、同 3 月に本報告書を刊行した。

第3節 調査の方法

1 調査範囲の確定

今次調査においては、市道が新設・拡幅がされる範囲を調査対象とした。しかし、対象地に埋蔵文化財が分布するかについては不明であったため、先行してトレーンチ調査を行い、埋蔵文化財が確認された箇所を広げて本調査とした。その結果、本調査区は 1 ~ 5 区の範囲となった。このほか、用地内で埋設管や電柱、擁壁等の既存構築物により埋蔵文化財が破壊を受けている箇所については調査対象外とした。トレーンチ調査で終了した箇所は第 5 図に示したトレーンチ 1 ~ 3 で、状況は次のとおりであった。



第1図 道路等計画概略図

トレンチ1 市道上郷35号線拡幅部分のうち、西側の箇所。東側の5区との間に大きな比高差があり、ブロック擁壁で土留めされていた。地表下1.2mまで掘削したが、堆積は表土30cm—砂礫層20cm—シルト層30cm—砂層20cm—以下は酸化鉄沈着のあるシルト層・疊層であり、安定した面が認められなかった。5区の一部で検出された旧河道とみられる。

トレンチ2 市道上郷35号線拡幅箇所の南側。地表下80cmで遺構検出面（基本層序V層）に達したが、遺構・遺物は検出されなかった。層序は基本層序I・II・IV・Vの順で、III層を欠くが、他は同様であった。

トレンチ3 土曾川寄りに新設される市道上郷484号線のうち、過去の調査成果から遺構の存在が予想される段丘端部付近にトレンチを設定した。表土20~40cmの下に遺構検出面（基本層序V層）が露出した。道路予定地付近は段丘端部であり、土砂の流出等により遺構は残存していないとみられる。ただし付近の畠には黒曜石等の縄文時代遺物が散在しており、今後の開発では注意する必要がある。

2 調査区の設定

調査対象地は新たに道路用地となる箇所である。市道483号線は新設、同35号線は既存の道路を拡幅する。調査区の区画にあたっては世界測地系を用いる飯田市新埋蔵文化財メッシュ図による区画方法（飯田市教委 2009）に準拠し次のように区画した。（第2図）

- 1 1:50000 大縮尺地形図（国土基本図）の区画に準ずる（社団法人日本測量協会 1969『国土基本図式同適用規定』）。飯田市は第VII座標系に該当するが、表記を省略する。
- 2 座標系のY軸およびX軸を基準とし、南北300km・東西160kmの区域を30km×40kmの長方形区画に分割し、「LC」のようにアルファベット大文字の組み合わせにより区画名を表示する。
- 3 30km×40kmの区画を100等分し、3km×4kmの長方形区画に分割する。アラビア数字で区画名を定め、「LC75」のように表示する。
- 4 3km×4kmの区画を25等分し、600m×800mの長方形区画に分割する。区画番号をアラビア数字で表記し、「LC75 7」のように表示する。
- 5 600m×800mの区画を48等分し、100m×100mの正方形区画に分割する。区画番号をアラビア数字で表記し、「LC75 7-44」のように表示する。
- 6 100m×100mの正方形区画を2500等分し、2m×2mの正方形小区画（グリッド）に分割する。区画の名称は南から北へCA～CY・DA～DY、西から東へ0～49とし、例えば「DG34」のように表示する。

当該方式に基づくと、本調査箇所の大半は LC-74 7-44 に位置する。

グリッドを調査区内に表示するため、表土掘削を終えた段階で測量を業者に委託し、光波測量機を用いて調査区ごと数か所に基準杭の打設を行った。基準杭の設置後、上記の区画法により、2m×2mの正方形小区画（グリッド）を設定した。標高の折出も基準杭打設と同時に行った。

3 遺構の検出・記録、遺物の取り上げ

発掘作業は重機（バックホウ）による表土掘削を最初に行い、遺構検出後は作業員による人力の掘削へ移行した。

遺構は検出した順に「001」から通し番号を付与し、「SI001」のように表記した。なお、小穴（SP）については遺物が出土したもののみに遺構番号を付した。遺構掘削にあたっては基本的に小穴以外

は半蔽し、土層堆積状況を記録したが、検出状況が不明瞭であり、掘り下げを進めていく過程で遺構と判明したものや、その他の事情により記録が不可能であった遺構は、土層堆積の記録を欠くものも含まれる。堅穴建物および大型の土坑等は四分法を採用し、土層観察用の畔を残した状態で掘り下げ、土層堆積状況を観察・記録した。出土遺物の取り上げは基本的に遺構単位で行い、建物内の土坑やピット等からの遺物は元の遺構番号に情報を追加して取り上げた。また、必要に応じて出土状況図を作成し、それ以外の遺物は出土地点とレベルのみを記録した。遺構外遺物についてはグリッド単位で取り上げた。金属遺物は取り上げ後、遺物保存処理委託までの応急処置としてクリーニング等を行った。

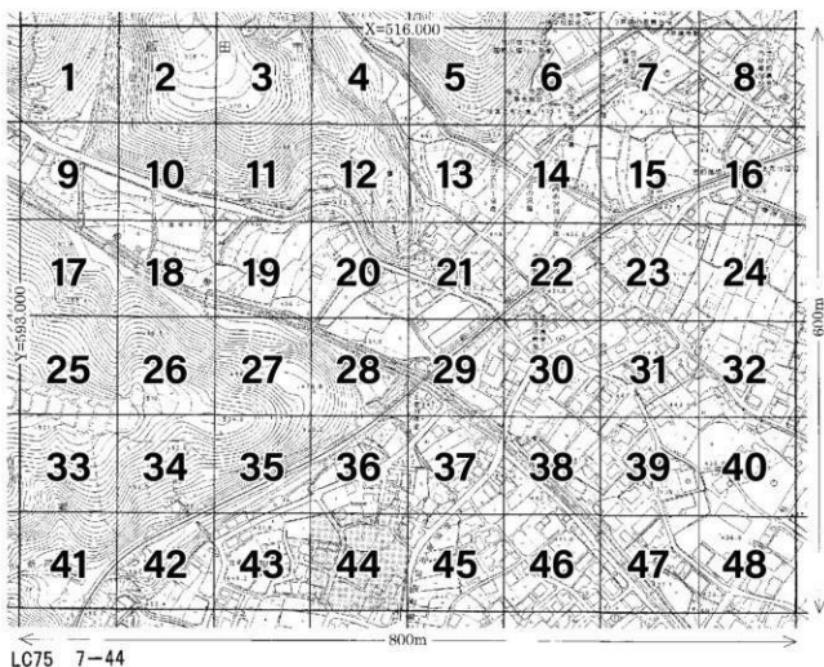
遺構等の図化は作業員が行った。調査区平面図、遺構平面図等の作成は基準杭とグリッド釘を目印に行った。土層断面図を含む遺構図面は1/20縮尺を基本とし、必要に応じて1/10縮尺の詳細図面を作成した。調査中の写真記録は、調査担当者が撮影を行った。写真機器はデジタル一眼レフカメラ（Nikon D750）を使用した。

4 整理等作業

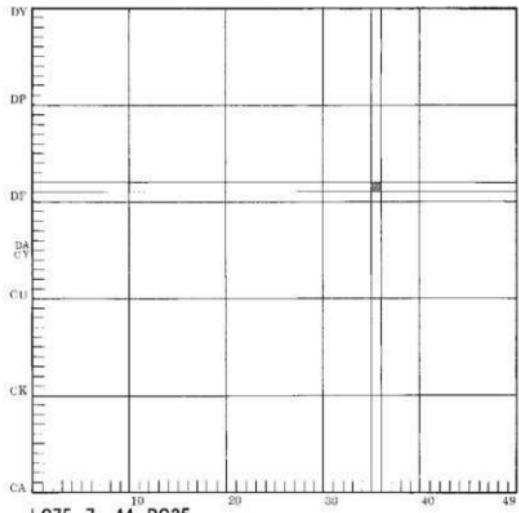
遺構等の図面類は現地で作成した実測図を基に第二原図を作成のうえ、手作業で清書した。遺構番号は現地で付した通し番号をそのまま報告まで使用することとした。整理過程で遺構の種類を変更したものについては、種別の略号のみ変更した。現地作業で番号が与えられていない小穴（SP）については、整理作業時に新たに通し番号を付けた。100番以降は、整理作業時に番号を新たに付した遺構である。そのため、100番以降の番号で遺物の取り上げや遺構写真的撮影は行っていない。

出土遺物は金属製品を除いたすべてを洗浄し、個別に注記のち、接合・復元・実測・拓本採り等を行った。金属遺物は委託先から返却後、処理時の所見やエックス線撮影写真を参考に遺物を実測し、図化した。注記は微細なものを除き、可能な限り全ての出土遺物に対して行った。注記には自動注記機を用いた。注記する際は、本調査の略号（NSU2759-1）、出土遺構名・出土年月日・その他情報の順に、アルファベット、ローマ数字及び漢字を用いて記載した。遺物取り上げ時に出土状況が図化されているものは数字が付されているが、注記では「No.」を省略し、遺構番号の次に数字のみを表記した。SX031については「上層」「下層」に区分して注記内容に加えた。ただし、金属遺物は直接注記せず、保存容器に情報を記載している。接合は市販の接着剤を使用し、欠損部分は石膏を補充して復元した。石膏の部分は水性絵具で着色した。

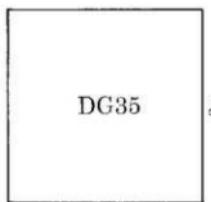
報告遺物の選定にあたっては、遺構に伴うものを優先した。遺構出土遺物は、完形のもの、全体形状が推定しうる破片及び特徴的な技法等がみられる破片は基本的に報告書に掲載し、図化が困難な遺物については報告対象から除外した。遺構外遺物は優先度を低くし、器種・器形、産地及び年代などが推定できる程度の情報をもつ遺物、あるいは特徴的な遺物を選択した。



LC75 7-44



LC75 7-44 DG35



正方形小区画(グリッド)

第2図 調査区区画方法概略図

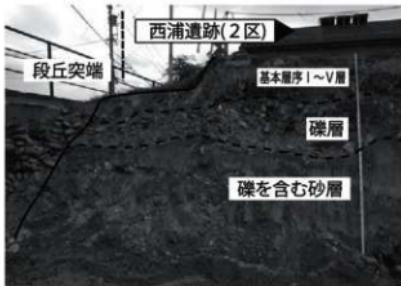
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

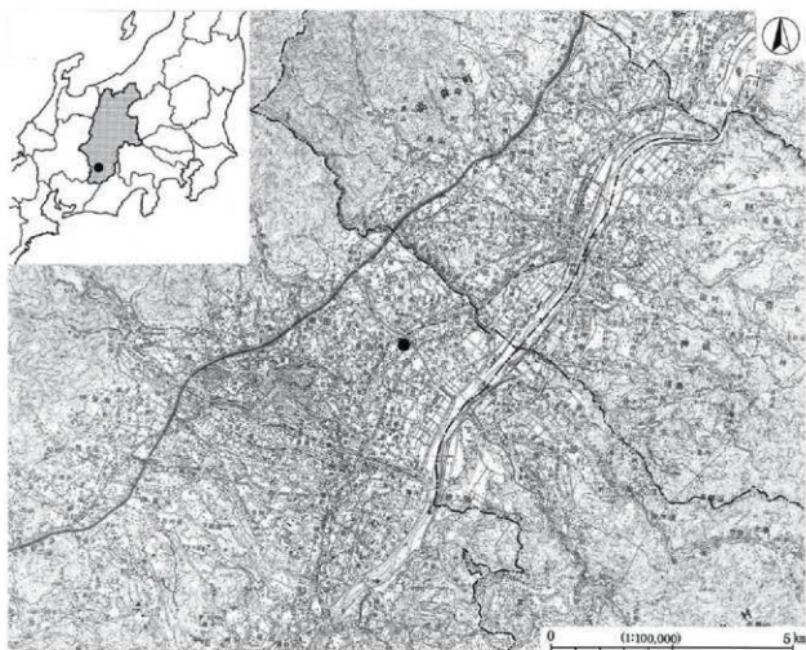
当遺跡は長野県飯田市上郷地区飯沼地籍に位置する。飯田市は長野県南部の都市であり、標高3000メートル級の高峰が連なる木曽山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼び習わされ、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流する。盆地の北部は比較的開ける一方、南部には高峰が少なく天竜川は川幅を狭めて峡谷をつくりながら太平洋へ向かう。この起伏の合間を縫うように主要な交通路が各地へ伸びており、国道152号（秋葉街道）・国道151号（遠州街道）・国道153号（三州街道）によって静岡県西部・愛知県東部、西は中央自動車道・国道256号（清内路街道）によって木曾谷および岐阜県東部にそれぞれ通じる。

地質環境としては、中部高地から九州まで連続する断層線である中央構造線のすぐ西側に飯田市域の大半が属している。このあたりは領家帯と呼ばれる花崗岩を基盤とする地質構造を特色とし、基盤岩体の上に河川等の作用で形成された砂礫層や、火山灰等による堆積層が乗ることで基本的な地質構造をなしている。伊那盆地では、山麓部から天竜川河床の間に比高差約10～30m程度の段丘崖が数段にわたって発達するのが景観上の大きな特色である。このように区画された標高差のある平坦面は、念通寺断層付近を境に大きく「上段」（うわだん）と「下段」（しただん）に分かれ。また、それらの段丘面を木曽山脈の前山から天竜川に向けて流れる小河川が区切ることにより、独立した小地域をいくつも形成している。上段や下段の一部にかけては、赤土の名で知られる風成ローム層が堆積し、その下は木曽山脈方面から土石流等により運搬されてきた花崗岩礫が占める。一方、氾濫原が広がる下段では赤土はほとんどみられず、砂礫層が主体となる。西浦遺跡においては、調査後の道路工事における掘り割りで、基本層序V層より下に花崗岩の大礫の堆積層、さらに下に礫を含む砂層が確認された（第3図）。

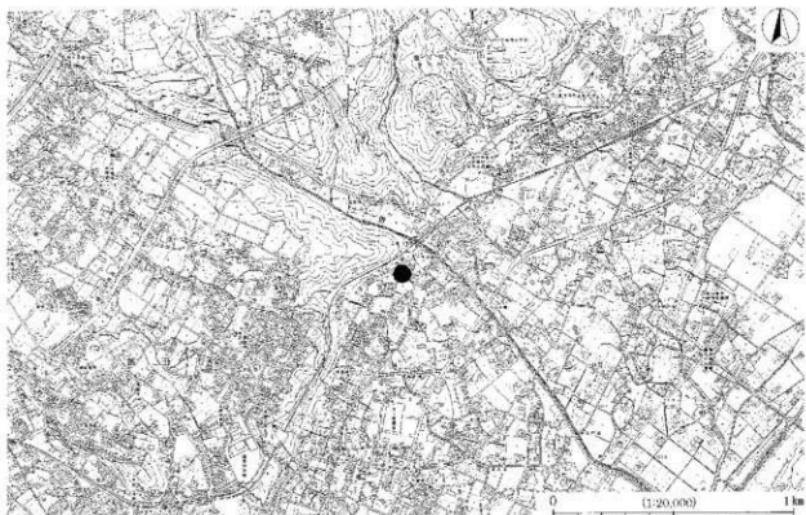
西浦遺跡は上郷地区の北端部に位置し、土曾川右岸域の段丘面に広がる。当遺跡が所在する上郷地区は天竜川右岸域の一角を占める主要地区のひとつで、北は土曾川を挟んで座光寺地区と、南は松川を挟んで松尾地区と接する。西浦遺跡が所在する飯沼地籍の特徴は、天竜川の支流に沿って微高地が形成され、段丘の内側に低湿地が広範囲に広がる点にある。微高地には各時代の集落遺跡が分布し、低湿地では古くは弥生時代から稻作が営まれ、現在に至るまで水田として利用してきた。『下伊那の地質解説』（下伊那地質誌編集委員会 1976）によると、当遺跡一帯は「低位段丘Ⅰ」に区分され、そのなかでも上郷飯沼付近を標識とする段丘面「飯沼面」よりも1段上の「中村面」にあたる。遺跡の範囲は南北約400m、東西幅約250mで、標高は北側の尾根の突端付近で最も高く、南東方向に緩やかに傾斜する。遺跡の東端は段丘端部であり、そこから比高差5～6m程度の急峻な段丘崖がひとつ地形的境界をなし、ママ下遺跡などが分布する下位の飯沼面（低位段丘Ⅱ）に至る。調査地付近は、この段丘面のなかでも土曾川に比較的近く、標高は高い地点である。



第3図 西浦遺跡段丘端部地層（調査後の工事中撮影）



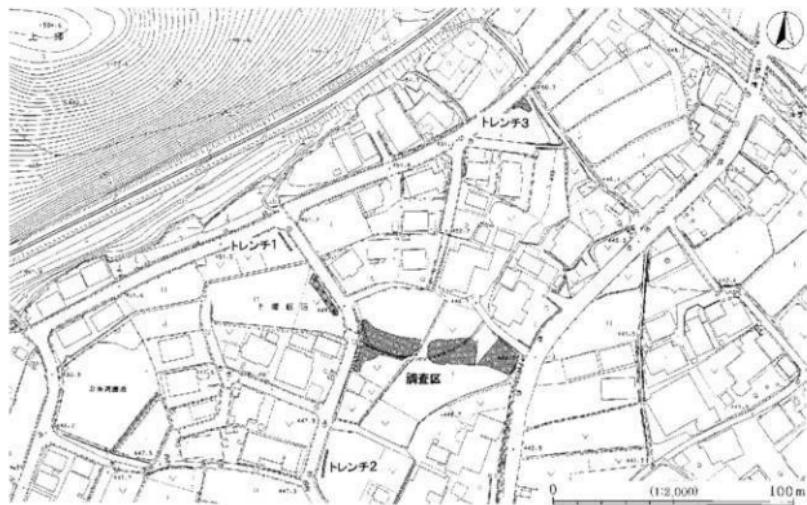
第4図 調査地位置図(1)



第5図 調査地位置図(2)



第6図 周辺遺跡分布図



第7図 調査位置詳細図

第2節 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、市内では山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡が後期旧石器時代の初頭頃とされ、日本列島最古級の遺跡として著名である。

縄文時代になると、座光寺地区の美女遺跡等で早期の集落が形成される。中期に入ると集落が増加し、各段丘面から中山間地域に至るまで、各所で集落が営まれた。中期後葉は当地域が最も隆盛を極めた時期で、上郷地区では黒田大明神原遺跡や黒田八幡原遺跡などが大集落として知られる。

弥生時代には、当地域に稻作が伝来する。前期の様相はほとんど不明だが、中期になると低位段丘上に集落が発達し、湿地を生産域として農業生活が営まれる。後期になると集落が中位段丘から高所の山麓部にまで広がり、集落数も多くなる。上郷地区では、低位段丘の丹保遺跡が中期から後期にかけて営まれた大集落として知られるほか、高松原遺跡やツルサシ・ミカド遺跡など上段に後期の集落が広がりをみせるが、拠点的な集落をのぞき、多くは短期で廃絶する。

古墳時代の前期には松尾、伊賀良、鼎地区でそれぞれ前方後方墳が少数築造されるにとどまるが、中期中葉以降は爆発的に古墳が増加する。近年、中期から後期にかけて飯田市域を中心に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を一体的にとらえ、「飯田古墳群」と呼称している。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。これらから、大陸から導入された馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定されており、当時のヤマト王権の政策を顕著に伝えるものとして、前方後円墳11基と帆立貝形古墳2基が国史跡に指定されている。上郷地区では中期に溝口の塚古墳、後期には飯沼天神塚（雲彩寺）古墳が首長墓として造営され、後期後葉以降は円墳が主体となる。後期の古墳群として、別府地籍に展開する中島古墳群、化石古墳群が挙げられるが、鶴足院古墳のように単独で存在する古墳もある。集落については、松川に近い別府地籍の高屋遺跡・宮垣外遺跡周辺で中期の集落と墓域が把握されている。特に宮垣外遺跡は馬の埋葬土坑を伴う低墳丘墓があり、中期における馬匹に関する集団の墓として注目される。続いて後期には、ママ遺跡や堂垣外遺跡など、土曾川右岸域で後期の集落が発達する。

奈良時代に律令制が導入されると当地域は東山道信濃國伊那郡に編入され、座光寺地区に郡衙が設置された。同地区の恒川遺跡群では正倉院や祭祀遺構などが確認されており、恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている。

その後、上郷地区は平安時代末期に寄進地系荘園として当地域に成立した郡戸庄に含まれるようになったとみられる。当遺跡近辺はその一画である飯沼郷の推定地である。室町時代には、結城合戦に参陣した諸将に名のみえる飯沼氏の所領であったと考えられ、遺構として飯沼城、古城、原の城など、段丘端部や独立丘陵を利用した中世城郭が残るが、正確な履歴はほとんど判明していない。当地は飯沼氏の後、竜東の知久氏が勢力を伸ばし支配するが、天文23年（1554）、甲斐の武田氏の侵攻を受けて滅亡する。天正10年（1582）には織田氏が伊那谷に侵攻し、武田氏の勢力は一掃された。その後は徳川氏、豊臣氏などによる支配を経て、近世になると幕藩体制のもとで飯田藩の所領となり、最後は堀氏の統治を経て明治を迎えた。

第3節 調査位置と周辺の調査履歴

1 調査区の位置（第4・5・6・7・8図）

今次調査区は、当遺跡の中央北寄りから東端部にかけての区域である。市道上郷35号線の拡幅、同上郷483号線の新設・拡幅区域に該当する。第2章で述べたとおり、排土の置場を確保しつつ調

査区を折り返しながら進めたため、調査順に調査区番号を設定している。西側から5区、1区、4区、3区、2区とした。トレンチを含む総調査面積は660.17 m²である。

2 周辺の調査履歴

西浦遺跡では、昭和期に旧上郷町教育委員会が町道（現：市道193号線）を新設する際に発掘調査を実施し、縄文時代早期から前期にかけての集落跡が調査されたが、調査報告書は未刊のため詳細は判明していない。今次調査区の西側の段丘崖下を通る道路部分の調査であり、当初は縄文時代集落の分布が調査区まで広がる可能性も考えられた。一方、段丘崖下のママ下遺跡は土曾川右岸の微高地に広がる遺跡で、古くから土師器・須恵器等の遺物が散布する地域として知られてきた。平成13年度に店舗建設に先立つ発掘調査を実施し、古墳時代後期を中心とする集落のほか、平安時代から中世の構築・遺物も確認された。その南側の堂垣外遺跡でも該期の竪穴建物を14軒確認し、地形的にも連続する。のことから調査担当者は、ママ下遺跡と堂垣外遺跡の古墳時代後期竪穴建物群を同一の集落と考えている（坂井・羽生 2003）。この時期の墓域として、調査区北側を流れ土曾川の谷筋に後期の古墳群が分布する。そのうち、座光寺地区のナギジリ1号古墳は調査により横穴式石室を主体とする実態が判明しており、6世紀末に築造され、8世紀代に至るまで墓として利用されていたことが明らかになっている。

3 飯沼塚田古墳に関する記録

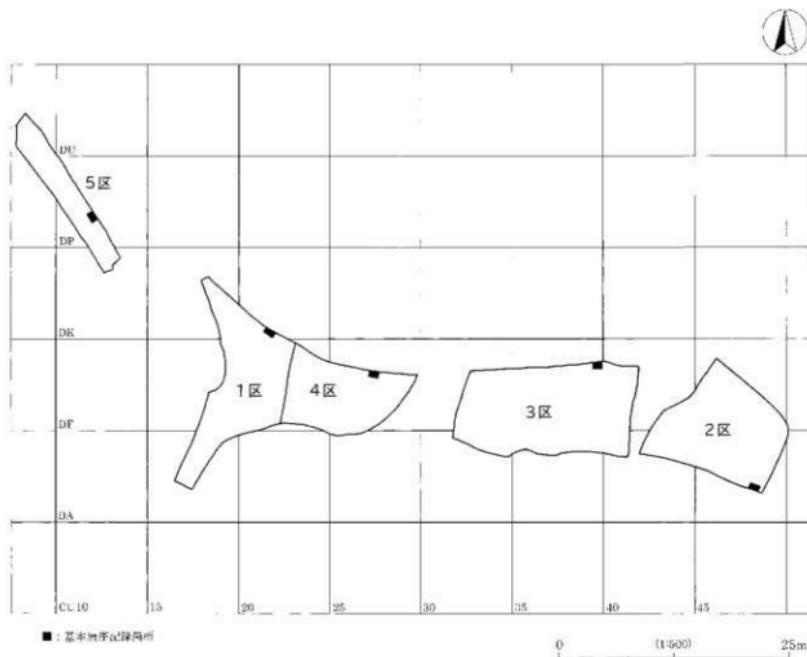
飯田市埋蔵文化財包蔵地分布図には、調査区付近に「飯沼塚田古墳」が消滅古墳として登載されている。当古墳については、『下伊那史』第2巻（1955年、下伊那史編纂会）第4章に次の記載がある。

塚田

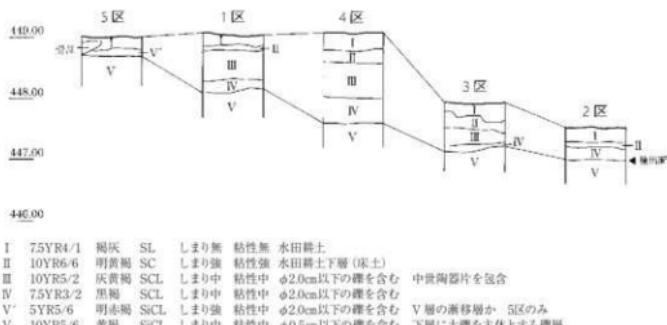
大字飯沼の西北部丘部落、竹内安雄氏宅の西南三〇米に、字を塚田という水田がある。地表より深さ三〇～四〇厘米、縦二・五～三米位の間に大石がある。一枚岩だろうと想像せらるるが掘り下げることができない、それは石室のふた石だと里人は語つている。（中略）

出土物もないけれども、字名を塚田といい、すぐ東につづく水田の地字が塚越であることにより、昔此処に古墳があつてそれが水田になつたと推考せられる。（後略）

以上の情報から、飯沼塚田古墳があったとされる箇所は今次工事計画地のうち、市道上郷483号線新設箇所付近と考えられるため、埋没古墳の検出を予測した。念のため調査前に当該地付近を踏査したが、この付近は完全に水田化しており、地表面に古墳としての痕跡はまったく視認できなかった。



第8図 調査区略図



第9図 基本層序

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

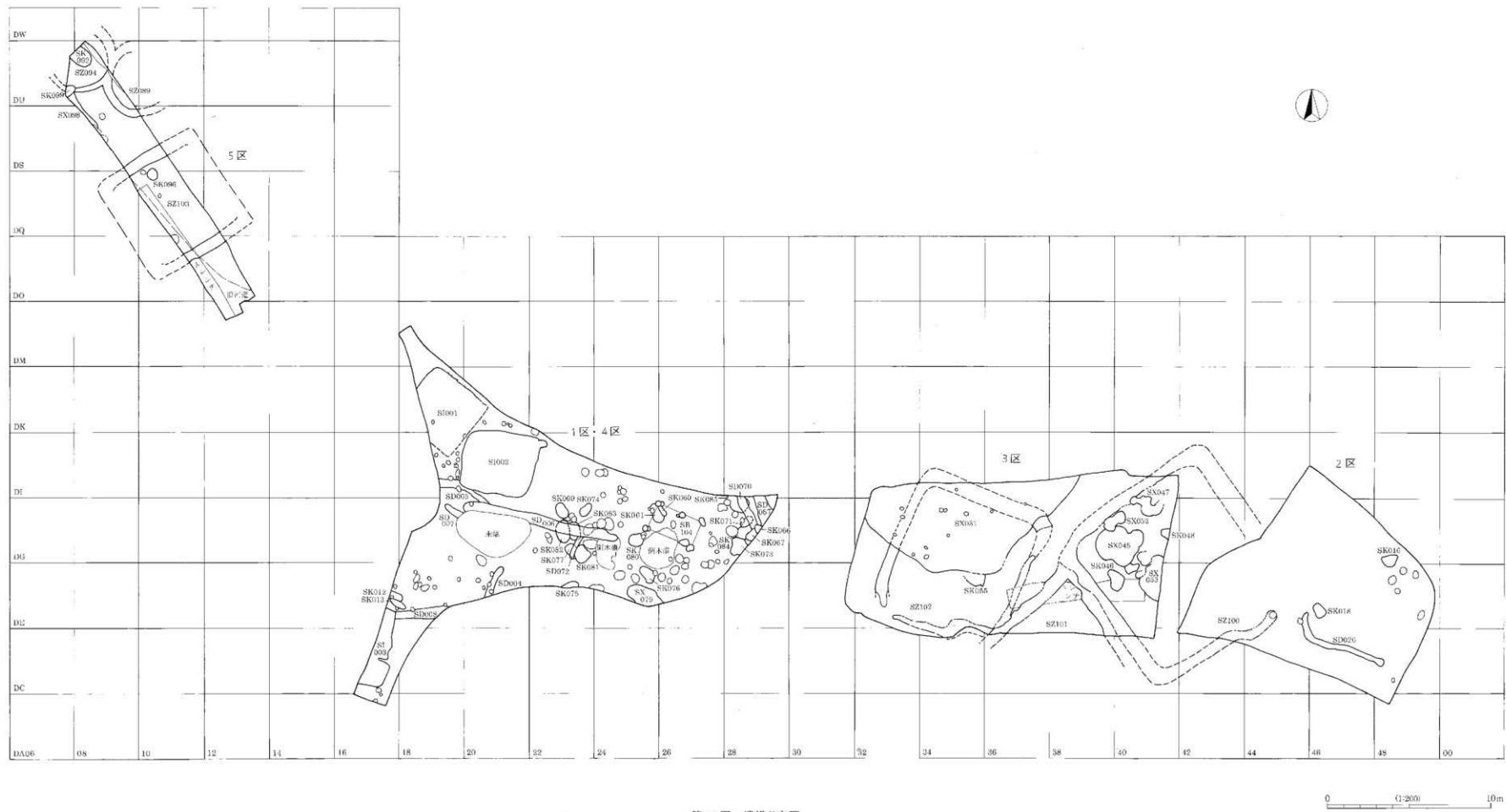
基本的な層序は、調査区ごとに観察・記録した（第9図）。地表側からⅠ層～Ⅴ層に分かれる。遺構検出面（Ⅴ層上面）までの深さは調査区によって大きく異なり、浅い5区で30cm前後、最も深い4区で150cm程を測る。Ⅰ層・Ⅱ層は水田耕土と床土である。Ⅲ層は灰黄褐色のやや砂質の土層で、1区・4区でやや厚く堆積する。中世陶器を包含することから、該期の堆積層とみられる。Ⅳ層はⅢ層の下に堆積する黒褐色土である。Ⅳ層下の明黄褐色ローム質層のⅤ層上面で遺構を検出した。5区は全体的に水田造成時の削平が著しく、表土下にⅤ層に土質の近いV'層を挟んで遺構が露出する。2区も造成の影響が大きく、Ⅲ層は削平され残らず、段丘端部に近い箇所ではⅤ層下に堆積する花崗岩礫層が露出するほどであり、遺構の残存状況は最も悪い。このほか、3区ではもともと田畠の境界に高低差の大きい段差があり、SX031がある南西部と周溝墓が分布する南～東部で、遺構の検出レベルや遺構の残存状況が異なる。後者は水田による削平が遺構の上部に及んでおり、前者と比べて遺構検出面が30～50cm低い。

第2節 成果の概要

調査の結果、検出した遺構等は以下のとおりである。（遺構分布図：第10図）

堅穴建物	3棟	(SI001、002、003)
掘立柱建物	1棟	(SB104)
大型遺構	1基	(SX031)
方形周溝墓	4基	(SZ100、101、102、103)
円形周溝墓	2基	(SZ089、094)
溝	9条	(SD004～008、026、057、070、072)
土坑	27基	(SK012、013、016、018、046、048、055、061、062、066、067、069、071、073～077、080～085、092、096、099)
性格不明遺構	6基	(SX045、047、052、053、079、098)
小穴（ピット）	114基	

堅穴建物 SI001 は弥生時代後期に、SI002 は平安時代に位置づく。SI003 は古墳時代後期頃と推定する。3区に大型の遺構 SX031 があり、古墳時代後期の武器、馬具、須恵器、姿身具等が出土した。周溝墓は段丘端部から奥にかけて6基を検出した。時代の決め手に乏しいが弥生時代後期とみられる。溝とした遺構にも周溝墓の可能性があるものが含まれる。また、調査区全域に小穴（ピット）が多く分布する。4区で掘立柱建物 (SB104) 1棟を把握したが、他は建物跡としてとらえることはできなかった。以下、本報告における弥生～古墳時代の年代については山下誠一の論考（山下 1999・2001・2004）、平安時代については飯田市恒川遺跡群を基軸とする編年（伊藤 2005）にそれぞれ準拠する。また、古墳時代から平安時代の須恵器・瓷器に関しては、尾野善裕による猿投編年（尾野 2000）および『愛知県史』による年代観（城ヶ谷・井上 2015）を参考とした。



第10図 遺構分布図

第3節 遺構

1 堅穴建物 (SI)

SI001 (第11図、写真図版3)

概観：1区のグリッドDL19とDK19を中心に位置する。主軸はN 50° Wを向く。北西隅付近は調査区外である。平面形は1辺約4.0mの隅丸正方形と推定されるが、南側では遺構の残存状況が悪く、南東壁はまったく把握できなかった。

埋土：重機掘削時に覆土上部の多くが失われたため単層として把握したが、覆土の特徴から自然埋没とみられる。

床・壁：貼床は5cmほどの厚さがある。全体によく叩き縮められ硬化しているが、南側付近では不明瞭となる。壁は周溝からわずかに間をあけて急に立ち上がる。北隅付近では壁がオーバーハングする箇所がある。北～西壁際に沿って直径5cm前後の小穴の列が続く。

柱穴：P1～P3が主柱穴とみられる。P1とP2は床面から50cm前後の深度まで掘り込まれる。P3は床面から20cm程度と他に比べて浅い。P4は補助的な柱穴とみられる。

炉：建物中央奥寄りに2基ある。炉1は長軸長63cm、短軸長42cmを測り、床面から9cmの深さがある。中央付近にピット状の深まりが1箇所ある。炉2は長軸長35cm、29cm、深さは7cmを測る。炉1にわずかに切られると判断したが根拠は弱く、同時に使用されていた可能性もある。

建物内施設：建物内の周溝は壁から10～20cm程の間隔をあけ、20cm前後の幅で外周部に掘り込まれる。全周せず、途切れる箇所がある。ほかに建物内土坑P5とP6がそれぞれ南東壁際に並ぶ。P5は位置からして入口施設、P6の横には床面が盛り上がる箇所があることから、貯蔵穴の可能性がある。

遺物出土状況：全体的に少ないが、炉内や炉の付近に土器(1・2、4)が集中する。柱穴P1の底には直口壺(3)の破片が埋め込まれていた。北東壁付近の埋土中から有孔磨製石包丁(5)が出土した。

時期：出土遺物から弥生時代終末期に比定される。

SI002 (第12図、写真図版4)

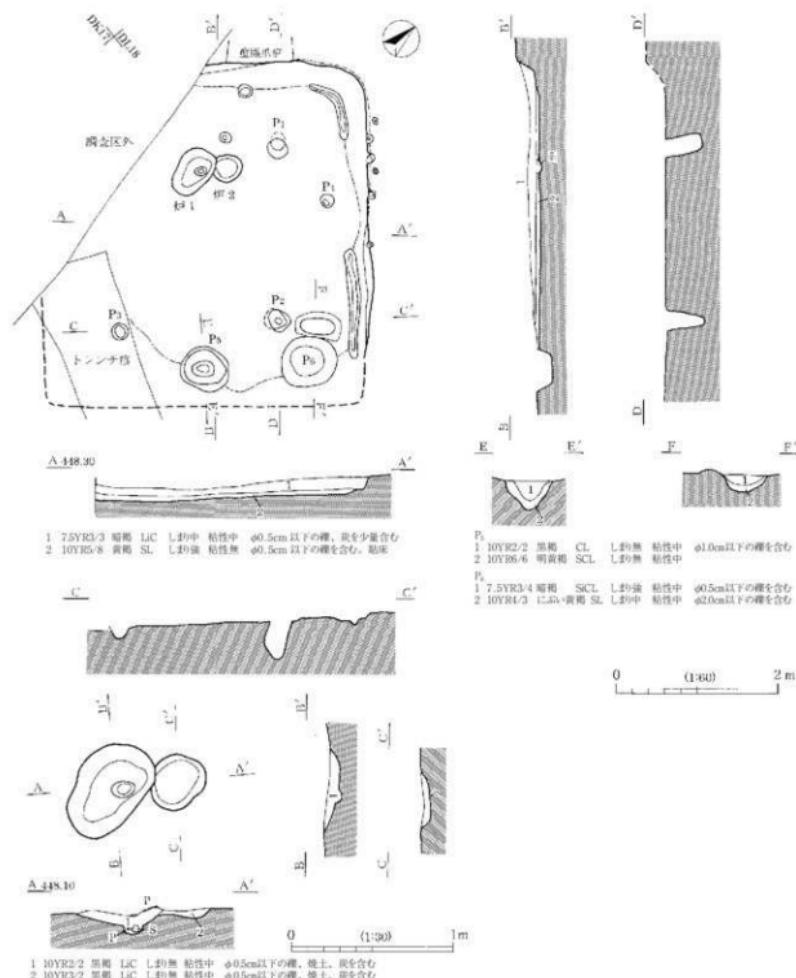
概観：1区のグリッドCE22に位置し、主軸はN 100° Wを向く。建物全体を調査した。平面形は北壁のラインが中央付近でわずかに折れ、不整方形を呈する。長軸長は4.6m、短軸は3.9mを測る。

埋土：堆積状況から自然埋没とみられる。

床・壁：貼床はしまりが弱く、非常に薄く床面に貼られているだけである。東壁付近ではほとんど不明瞭となる。壁際に深さ5cmほどの浅い周溝がめぐるが、これも東壁のあたりではみられない。壁の立ち上がりは緩く直線的である。

柱穴：P1とP2が主柱穴と思われるが、建物中央より西に寄る。また、相互の芯々間は1.5mほどとかなり近い。建物東側の床面に柱穴は認められない。このほか、建物周辺に14個の小穴がめぐっている。大きさは概ね20cm前後、検出面からの深さは3cm～31cmを測る。東壁側では検出されなかつた。これらは建物の屋根等を支える補助的な柱の痕跡の可能性がある。

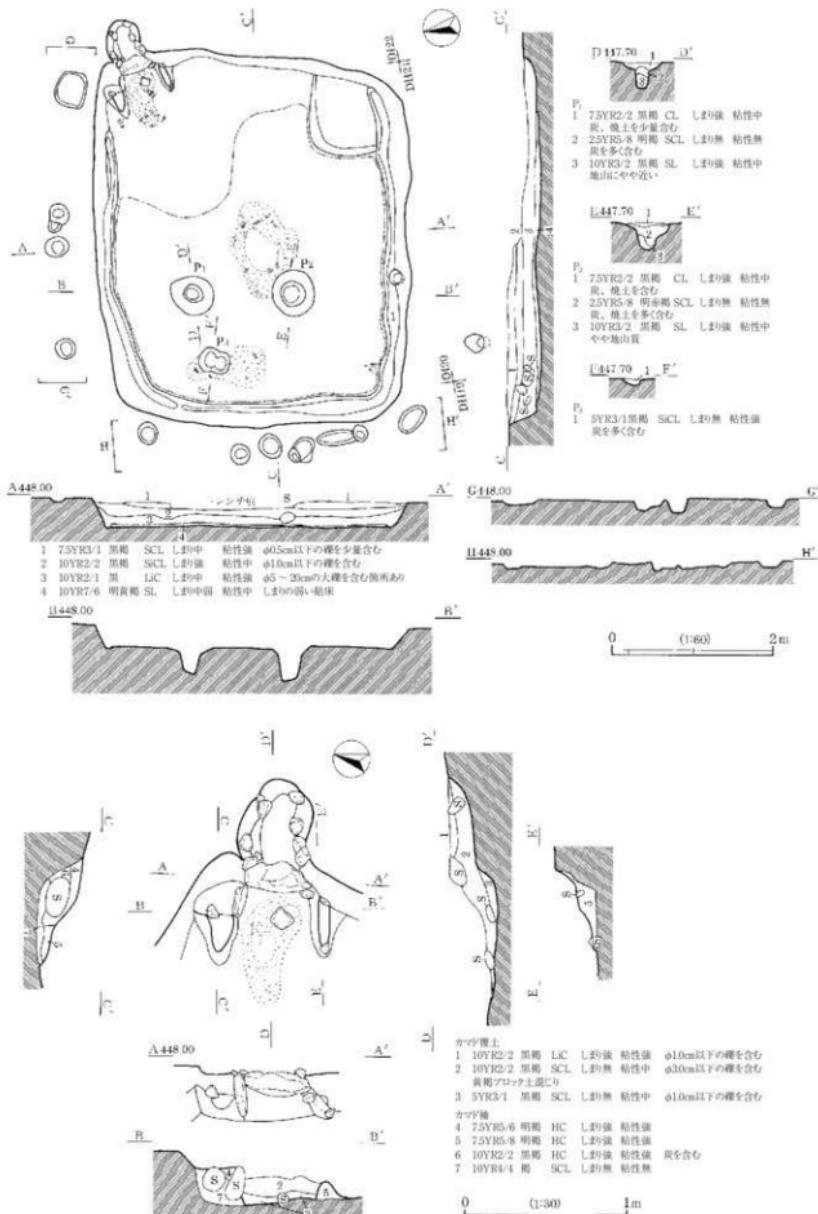
カマド：北東隅に付設された石芯粘土カマドである。焚口から煙道端部まで113cm、袖を含めた幅は93cmを測る。長さ40cm、幅25cmほどの天井石が1枚残る。右袖はほとんど壊されているが、左袖は芯石も含めて比較的の残りが良い。煙道の側壁にも小型の石を並べる。掛口付近の底に支脚の可能性がある石が敷かれる。



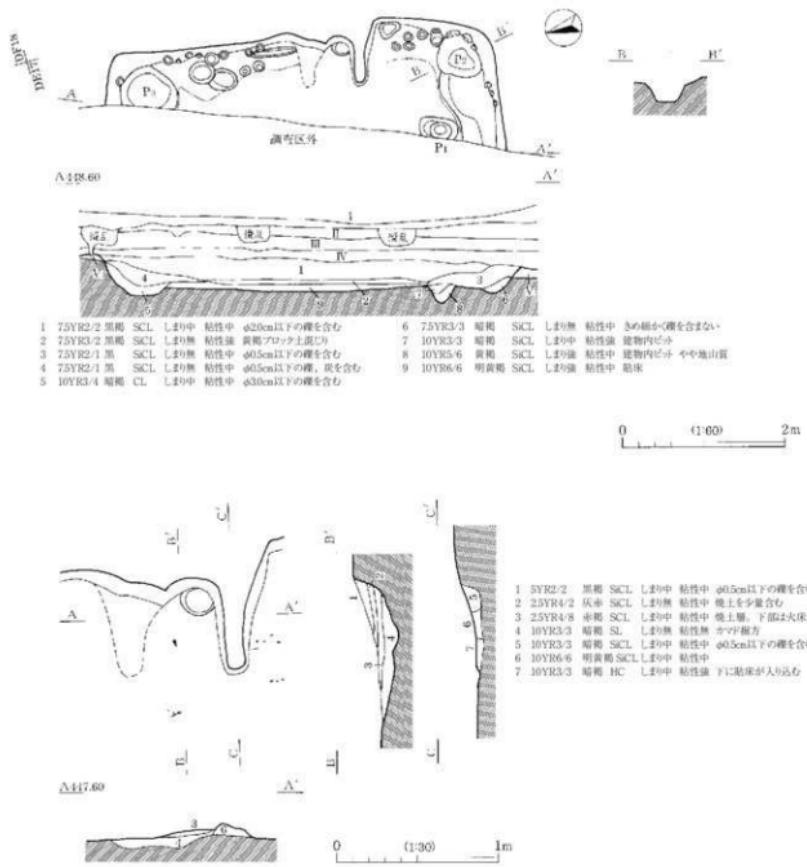
第11図 壇穴建物 S1001

建物内施設: 南東隅に貼床がなく、床面から5~10cm程度低くなる箇所があり、入口の可能性がある。西壁近くに浅い瓢形のビット(P3)がある。建物中央付近の床面に焼土と炭化物が広がる箇所がある。これに伴う掘り込み等ではなく、床面が直接火を受けている。焼土を採取して精査したが鉄片等は得られず、鍛冶等を行った痕跡は認められなかった。

建物外周の小穴: 建物の東壁付近を除く外周部に13基の小穴が並ぶ。直径は10~40cm程度を測り、壁からの距離は10~70cmと差がある。いずれも建物の床面よりも浅く、建物の補助的な構築材の痕跡と考えられる。



第12図 竪穴建物S1002



第13図 積穴建物S1003

遺物出土状況：埋土中から須恵器片や灰釉陶器片などの平安時代遺物が出土したが、量はきわめて少ない。敲打器（9）、石匙（10）は当建物に直接伴わない混入品である。

時期：出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初頭）に比定される。

S1003（第13図、写真図版5）

概観：1区のグリッドDD17を中心に位置し、主軸はN 105° Eを向く。東壁付近に調査が及んだにとどまり、大半は調査区外である。平面形は不明だが、南東隅と北東隅の形状や規模から隅丸方形に近いプランと推定される。東壁は4.9mを測る。

埋土：堆積状況から自然埋没と考えられる。

床・壁：床面はやや弱いが硬化している。壁は周溝から緩やかに立ち上がる。周溝は幅20～40cmで南壁際に掘り込まれるが、東壁際にはめぐらない。

柱穴: 南壁近くのP1は主柱穴の可能性がある。

カマド: 建物中軸のやや南寄りに構築された石芯粘土カマドである。右袖の構築粘土がわずかに残る。左袖はまったく残存しないが、貼床とカマド内の焼土範囲が途切れる箇所に輪郭が残る。カマド内は構築時に床面から10cm程度とわずかに掘り込まれているが、火床は床面とほぼ同レベルである。最奥部に直径約20cm、深さ5cm程度の円形のくぼみがある。煙道部は残存しない。

建物内施設: 南東隅と北東隅にそれぞれP2・P3があり、いずれも性格は不明である。このほか、壁面に沿って多数の小穴が列をなしている。径はほとんど5~10cm前後におさまり、深さは3~11cmを測る。建物内部に使用された何らかの構築材の痕跡の可能性がある。

遺物出土状況: 量はきわめて少ない。埋土中出土の土器器甕の口縁部(11)がある。

時期: 根拠に乏しいが、出土遺物等から古墳時代後期と推定される。

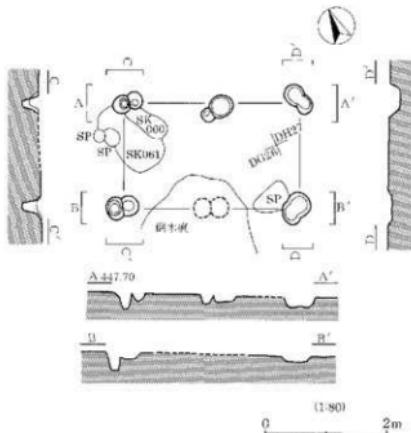
2 掘立柱建物(SB)

SB104(第14図)

概観: 4区のグリッドDG26を中心に位置する。

梁行1間・桁行2間の側柱建物である。1箇所につき2基の柱穴が重なり、同位置での建て替えが想定されるが、柱穴の先後関係と組み合わせは十分に把握できなかった。西側の梁は内側と外側の2穴どうしで組み合わせが想定でき、それぞれ梁行1.8mを測る。桁行は外側の柱穴の芯々間で1.4mを測る。東側では柱穴の深さは検出面から12~16cm程度と浅く、西側の組は30cm程と深い。南側の中央付近では倒木痕と重なり、柱穴を検出していない。

時期: 出土遺物はない。鉄滓を出土した土坑SK060を切ることから、平安~中世の遺構と考えられる。

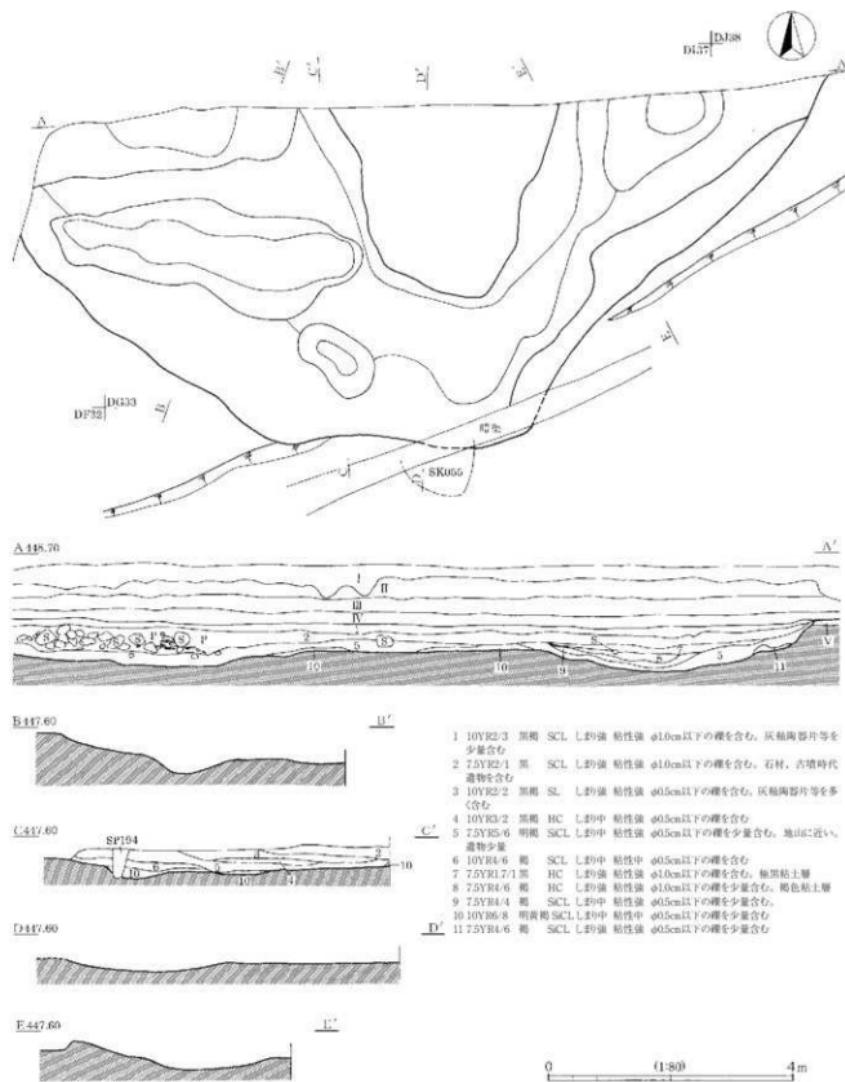


第14図 掘立柱建物SB104

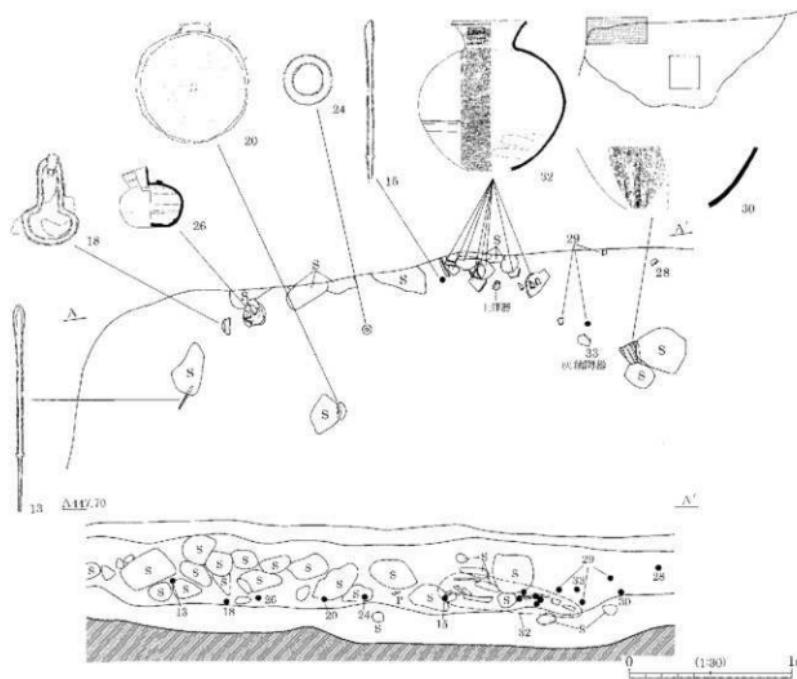
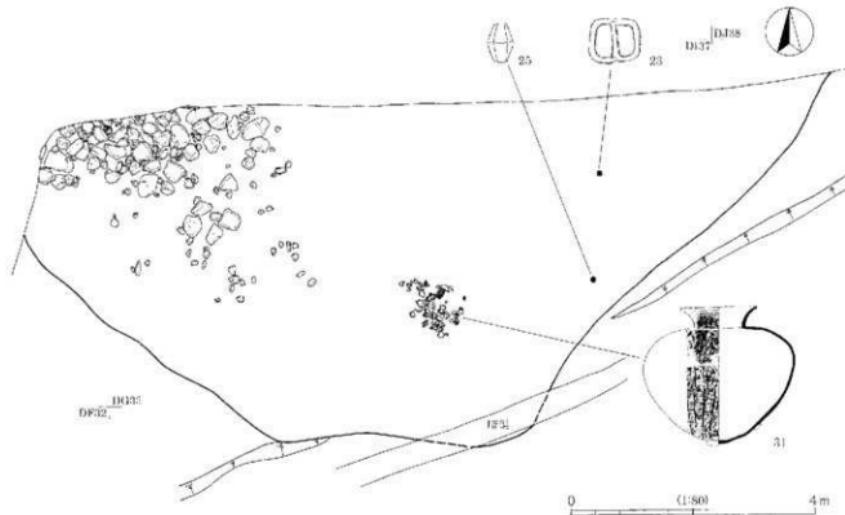
3 大型遺構(SX031)(第15~16・17図、写真図版7・8・9・10)

概観: 3区北寄りに位置する大型の遺構である。調査区内ではおおむね半円形の形状で、南側には張り出す箇所がある。調査で検出した範囲は東西13.5m、南北4.6mにわたるが、遺構全体のうち一部とみられる。西端付近と東端付近にそれぞれ遺構の外周に沿って掘られる深い落ち込みがあるが、他にも大小の落ち込みが底面一帯に分布しており、深さは箇所によって異なる。遺構中央付近には周囲と比較して浅く掘り残された半島状の箇所があり、南側の張り出しに対応しているようにも見える。東側では遺構の外周部が深く掘削され、断面船底状の溝が形成されている。そこから南側の張り出し部分にむかって次第に深度を浅くしていく。西側にも深い箇所は認められるが、東側に比べて大小の凹凸が目立つ。ただし、これらは本遺構の掘削と同時に下層の古い遺構を掘り上げてしまった可能性もある。

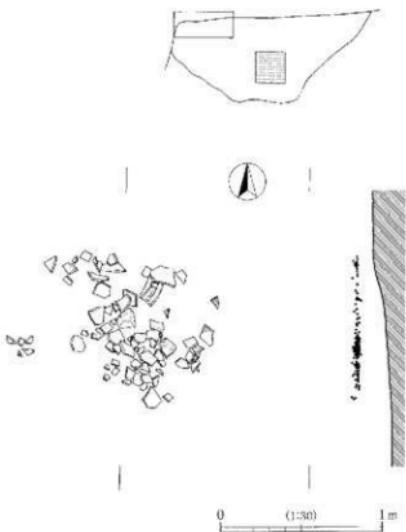
埋土: 1層は遺構上層の黒褐色土で、灰釉陶器片を含む平安時代の堆積層である。その下の2層は、遺構北西寄りに礫が集中し、古墳時代の遺物を包含する。1層より量は少ないが灰釉陶器片が混じる。この層については、礫の分布や古墳時代の遺物の混入状況などから、短期間のうちに人为的



第15図 大型遺構 SX031



第16図 SX031 遺物等検出状況



第17図 SX031 須恵器甕出土状況

遺物出土状況: 鉄製の武器、馬具、須恵器等の古墳時代遺物の大半は、遺構北西付近に分布する礫の間や下から検出された（第16・17図）。遺物破片の出土レベルは同一の個体でも一定せず、2層の礫に混ざって埋没している。礫がほとんど分布しないグリッドDJ33付近では、5層下部で須恵器の甕（31）が単独で出土した（第17図、写真図版10）。破片は1.0m×1.2m程の範囲にまとまり、ほぼ一定のレベルで分布することから、原位置を保つとみられる。また、甕の破片と遺構の底部との間に20cm前後の堆積層を挟むため、遺構構築から一定期間を経て甕の供獻が行われたと考えられる。鉢具（23）や切子玉（25）は遺物集中箇所から離れた位置で出土した。上層である1層を中心に灰釉陶器の椀・皿や緑釉陶器の破片が出土するが、分布に偏りはない。最下層からは弥生～古墳時代の土器、石器（37～39）がわずかに出土している。

時期: 遺物等の出土状況から古墳時代後期～終末期に構築され、平安時代に埋没したと考えられる。

4 方形周溝墓（SZ）

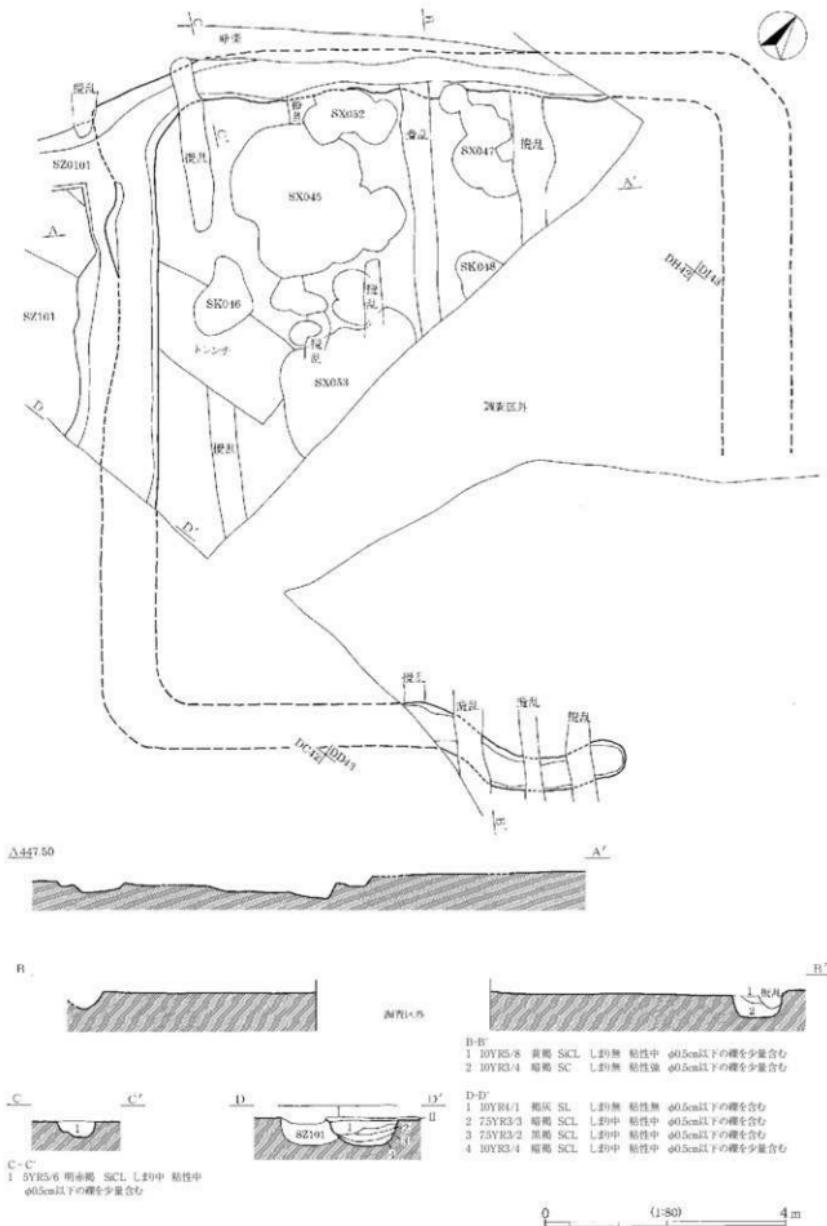
SZ100（第18図、写真図版11）

概観: 3区東側から2区にかけて位置する。グリッドDG42付近が中心とみられる。長軸方向はN40°Wを向く。東側は調査区外だが、平面隅丸方形とみられる。長軸長12.0mを測る。周溝は最大幅36cm、深さは14～36cmを測り、南西の1辺をSZ101と共有する。D-D'断面から、SZ101の構築後に本遺構が構築されていることが判明した。2区で検出した溝を南東側の周溝と判断したが、削平により、東側の途中で途切れている。北東側の1辺にあたる部分の溝は、一切痕跡が認められなかった。北西側の周溝は近代の暗渠に沿って縦に半分ほどが切られる。このほか、部分的に擾乱（耕作溝）およびトレンチのため周溝の上部が破壊されている。周溝は断面逆台形状に掘られ、自然に埋没している。

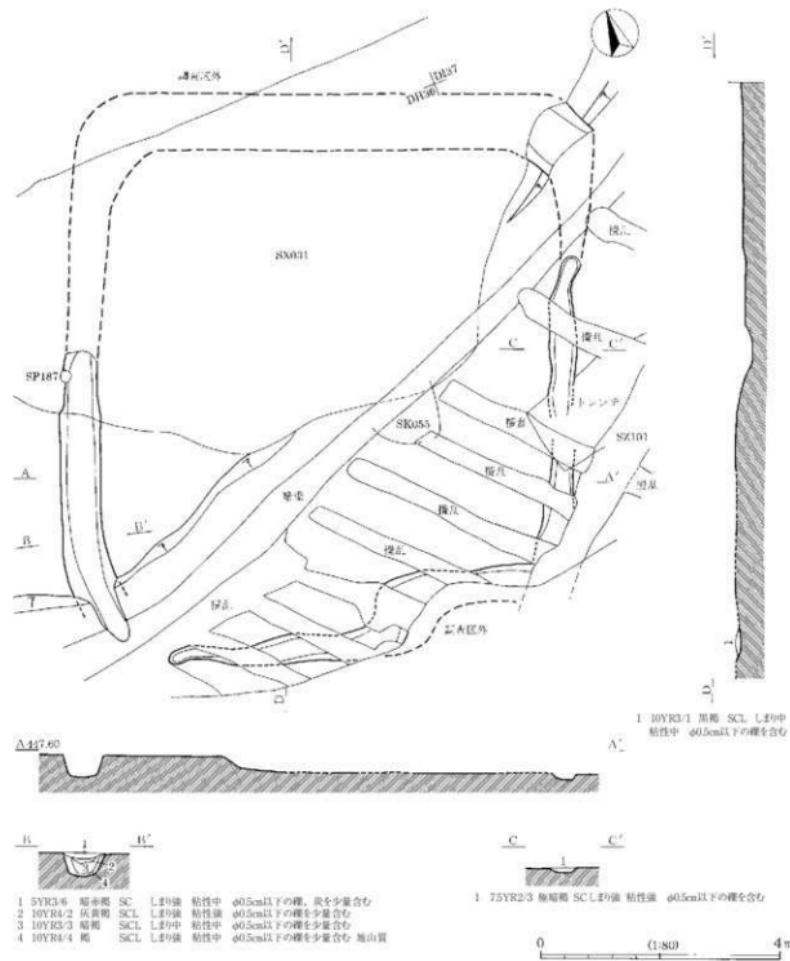
主体部: 不明。周溝の内側に位置するSX052、053は平面不整形で凹凸が多く、主体部とは考えら

に形成されたと判断できる。下層にあたる5層・6層・10層は暗めの黄褐色を呈するローム質の堆積層で、土質は基本層序V層に近く、本遺構の掘削後に自然堆積したとみられる。

礫の検出状況: 遺構の北西側に巨礫が多く分布する。黒色の2層を掘削すると表出した。最大70cm程度の巨礫が目立つが、10cm前後の礫も含む。花崗岩がほとんどを占め、わずかに赤色・青色チャートも含まれる。礫は角がなく丸みを帯びており、意図的に割られた痕跡のあるものもなく、川原石をそのまま持ち込んでいる。巨礫が2～3段程度に重なりあう箇所も認められるが、平面・立面の双方からみて規則的に積まれた様子はなく、ある程度まとまっているものの、全体的には散乱しているという印象を受ける。2層下の5層には礫はほとんど含まれない。



第18図 周溝墓 SZ100



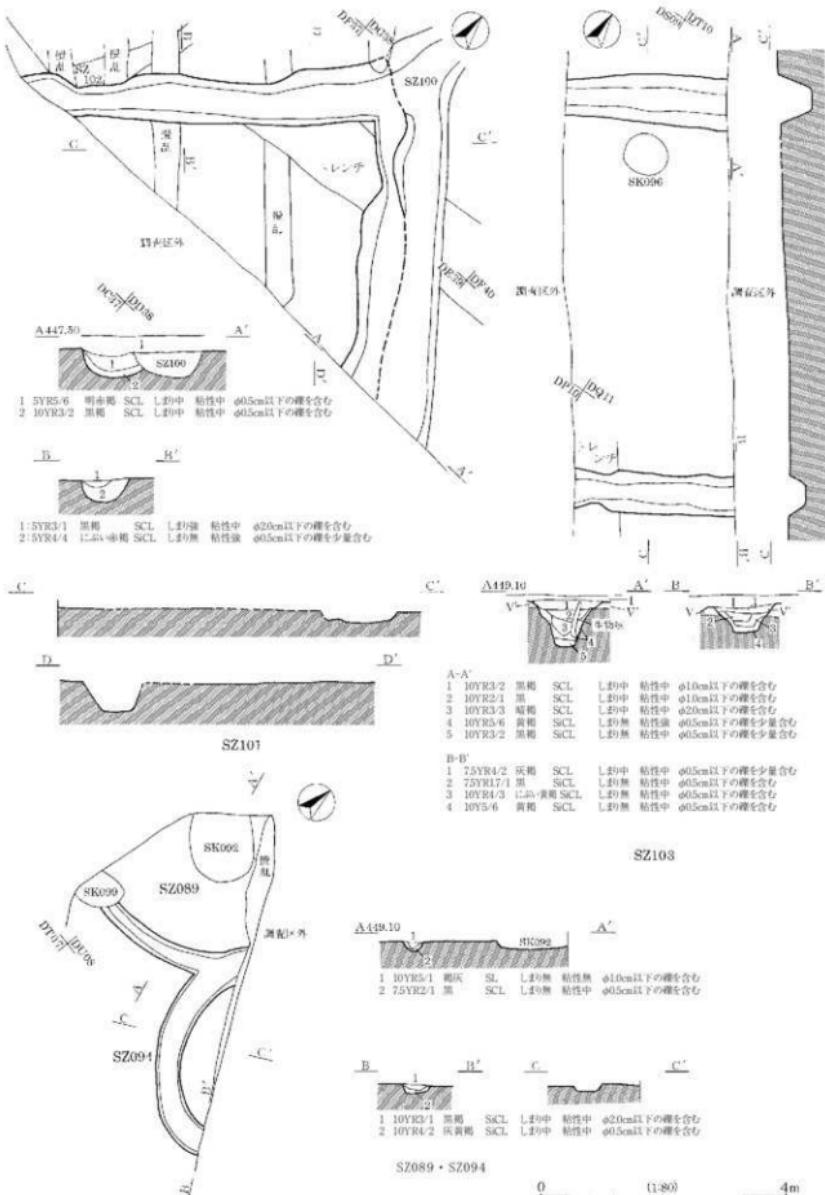
第19図 周溝基 SZ102

れない。

時期：遺物の出土はなく不明だが、造構の特徴から弥生時代後期と考えられる。

SZ101 (第20図、写真図版11)

概観：3区南側に位置する。規模は不明だが、DE38付近の東西6.0m、南北5.4mまでの範囲を調査した。主軸はN 38° Wを向く。周溝は最大幅95cm、深さは55cmを測る。北西の1辺をSZ100と共有する。A-A'断面により、本造構が先行して構築され、SZ100に溝を拡幅する形で切られて



第20図 周溝墓 SZ101・SZ103・SZ089・SZ094

第3章 調査の成果

いると確認できた。本遺構の西側に位置するSZ102の周溝の南東隅と一部が重複する。擾乱(耕作溝)やトレンチの影響を受ける。周溝は断面逆台形状に掘られ、自然に埋没している。

主体部：不明

時期：遺物の出土はなく不明だが、遺構の特徴から弥生時代後期と考えられる。

SZ102 (第19図)

概観：3区西側に位置する。グリッドDG34付近が中心となる。長軸方向はN 22° Eを向く。全体的な平面形は南北方向に長い長方形を呈するが、南側の1辺は途中で方向を変化させてクランク状となる。長軸長は推定9.7m、短軸長8.5mを測る。北側約半分は古墳時代の遺構SX031に大きく切られ、周溝は残らない。ほかの3辺についても等間隔で刻まれる擾乱(耕作溝)や、中央付近を通る近代の暗渠の擾乱を大きくうけ、部分的に途切れています。暗渠より南側は、遺構の上部がほとんど水田によって削平され、底部の一部を残すのみとなる。一方で暗渠の北側は検出面のレベルが上がり、地山が比較的残されていたため、西側の周溝は幅80cm、深さ40cmが残る。溝の断面形状は逆台形を呈し、幅の広い底部から急な立ち上がりをみせる。

主体部：中央東寄りにわずかに残る土坑SK055は、位置からして主体部の可能性がある。

時期：周溝から石錘(46)が出土したにとどまる。遺構の特徴から弥生時代後期と考えられる。

SZ103 (第20図、写真図版15)

概観：5区のグリッドDR11を中心に位置する。並行する溝2本について、溝の形状、全体の規模などから方形周溝墓と判断した。N 35° Wを向く。四隅のうちいずれにも調査が及ばなかったが、周溝どうしの間隔から、1辺7.2mの規模と推定される。北側の溝は幅88cm、深さ72cmを測る。断面はラッパ状に上に開き、底部は約30cmの幅がある。南側の溝は上端の幅が最大64cm、深さ40cm、底部幅40cmである。周溝は自然に埋没している。

主体部：不明

時期：北側の周溝から出土した土器片(40・41)から、弥生時代後期と考えられる。

5 円形周溝墓 (SZ)

SZ089 (第20図)

概観：グリッドDV08を中心に位置し、SZ089と北西で接する。周溝の幅は最大で36cm、周溝の深さは16cmを測る。土坑SK099に切られる。真円形と仮定した場合の規模は、直径4.8mである。

主体部：土坑SK092は当遺構の中心付近に位置し、主体部とみられる。

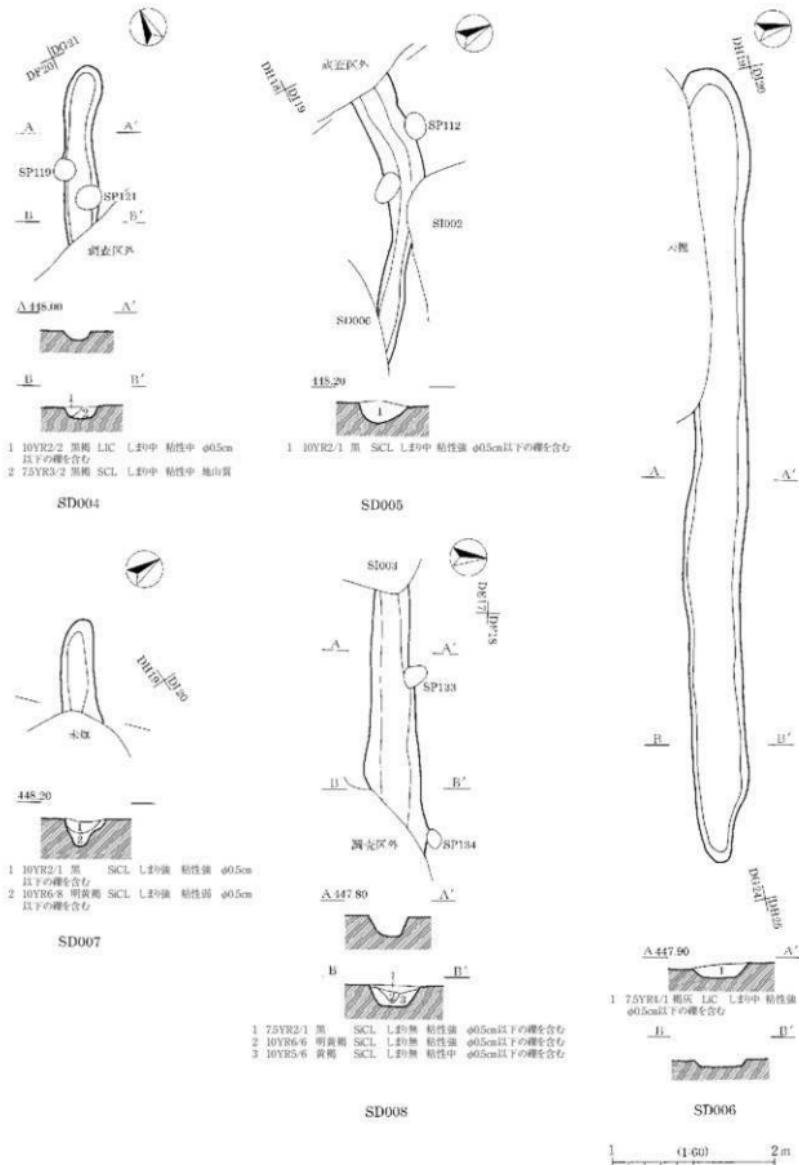
時期：遺物の出土はない。遺構の特徴から弥生時代後期と考えられる。

SZ094 (第20図、写真図版15)

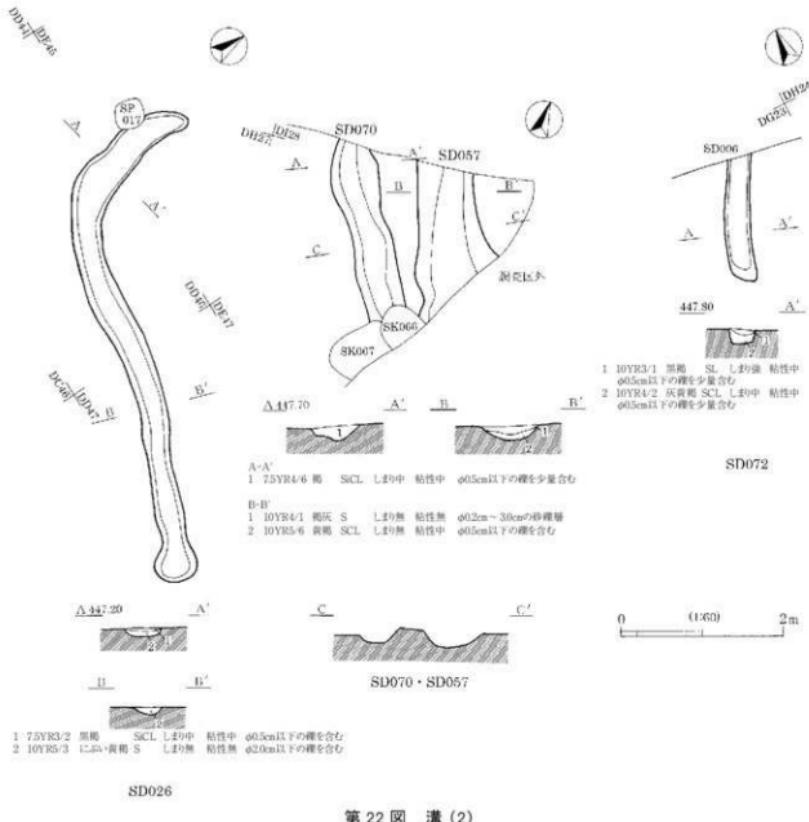
概観：グリッドDU09を中心に位置し、SZ094と南東で接する。主軸はN 50° Wを向く。周溝の幅は最大50cmを測る。遺構の上部は造成により削平され、東側は道路擁壁の設置により破壊が及んでいる。周溝は深さ14cmほどが残る。SZ094と周溝の一部を共有する形で重なるが、先後関係は把握できなかった。遺構の2/3以上は調査区外だが、周溝を真円形と仮定した場合、規模は直径4.2m程度と推定される。

主体部：不明

時期：遺物の出土はない。遺構の特徴から弥生時代後期と考えられる。



第21図 溝(1)



6 溝 (SD) (第21・22図)

SD004・005・007・008 1区のグリッドDG19付近を中心とする溝の一群で、断面形状は逆台形に近い。幅はSD004が42cmで最も狭く、SD008が72cmで最も広い。遺物はほとんど出土していないが、SD008は古墳時代後期の堅穴建物S I 003に切られるため、古墳時代以前とみられる。同様に、SD005は平安時代の堅穴建物S I 001、中世の溝SD006に切られる。調査区外へ続いため相互の関係は不明だが、SD004、005、008は一体としてみた場合に平面隅丸方形に近い配置を示し、溝の幅、覆土の性質も近似する。また、いずれも水が流れた痕跡などではなく、自然に埋没している。以上から、SD004、005、008は1基の方形周溝墓を構成する可能性がある。

SD006 1区から4区にかけて検出した、グリッドDH22付近を中心とする溝である。N 80° W の方向にほぼ直線的に掘られている。残存長10.3mを測る。断面形状は船底形を呈し、最大幅は75cmを測る。水性堆積等は認められない。SD005、SD072ほか多数の溝・土坑を切る。今次調査で

把握したなかでは、切り合いから最も新しいと判断される。遺物は縄文・弥生土器、須恵器、陶器片がわずかに出土している。他遺構との重複関係に加え、覆土が基本層序第III層に近似することから、中世の溝と考えられる。

SD026 2区のグリッド DD46 付近を中心とする溝で、残存長 5.7m を測る。西側が L字状に折れ曲がる。当該箇所は後世の削平が著しいことから、遺構の大半は消失したとみられる。断面は船底状で、幅は最大 50cm、深さ 10cm である。西側の湾曲や断面系及び SZ101 との位置関係等から方形周溝墓の可能性がある。

SD057・070 4区のグリッド DH28・DH29 に位置する。溝の最大幅は、SD057 は 102cm、SD 070 は 58cm を測る。検出面からの深さはともに 16cm を測る。断面は船底状である。双方とも土坑 SK066・067 に切られるが、SD070 は土坑 SK071、084、085 を切っている。SD057 の上層は砂礫が堆積しており、水路の可能性がある。

SD072 4区のグリッド DG23 に位置する。残存長 148cm、幅は最大 30cm を測る。北側の端部は SD006 で分断される。土坑 SK077、081、083 を切る。断面は船底状で、水性堆積層は認められない。切り合い関係から中世以前の溝と考えられる。

7 土坑（SK）

各土坑の実測図は図 23・24 に提示し、その他計測値等の詳細な情報は末尾の第 2 表に示した。特筆すべきものについて、以下に挙げる。

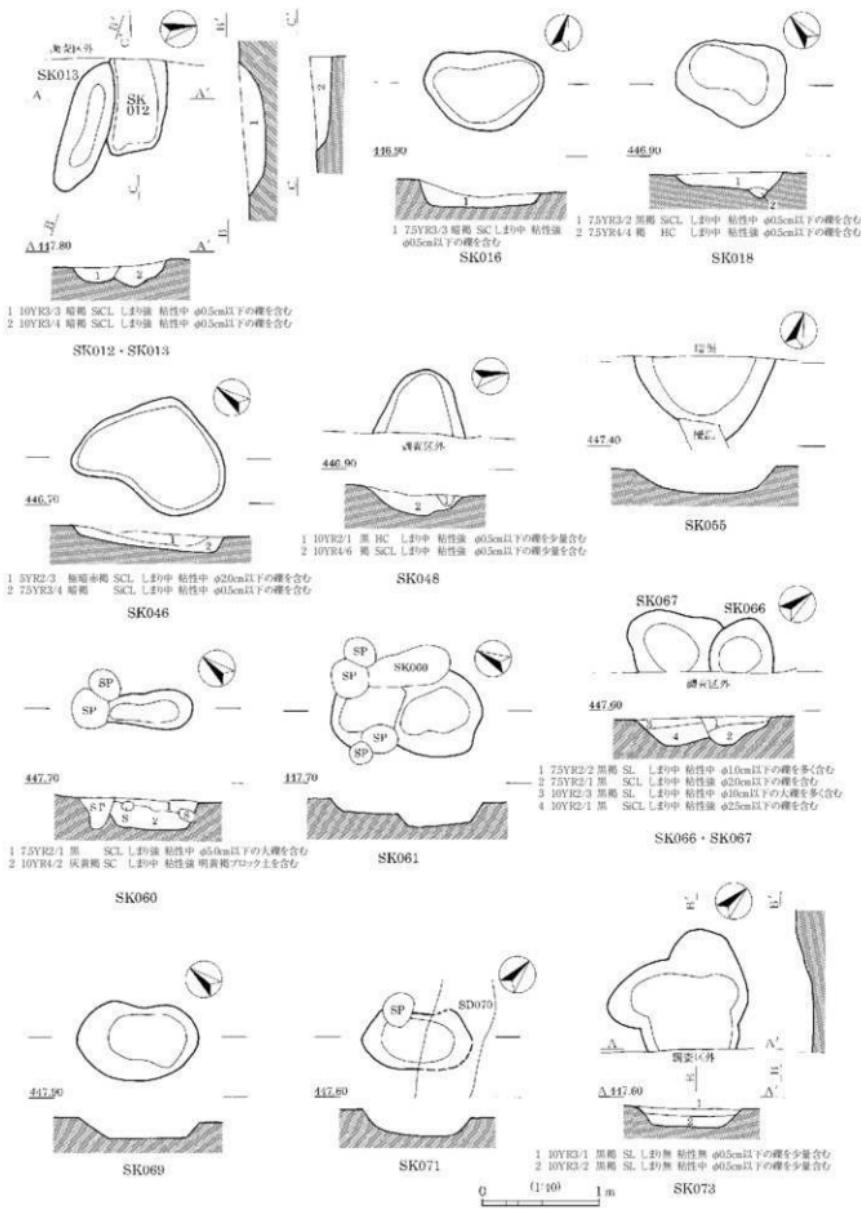
SK055 3区のグリッド DF35 に位置する。北側を SX031 と暗渠に、南側を近現代の耕作溝に破壊され、68cm × 115cm の範囲が残存する。検出面から深さ 22cm の断面船底状を呈する。遺物の出土はない。SZ102 の周溝内側にあり、中央東寄りにあたる位置に所在するため、主体部の可能性がある。

SK060・061 4区のグリッド DH25・26 に位置する 2 基の土坑である。SK060 は残存長 69cm、幅 34cm の長楕円形を呈し、掘立柱建物 SB104 に切られる。土層は 2 層に分かれ、上層で鉄滓 1 点出土した。また、下層には黄褐色土のブロックが多く混入しており、人為的に埋められたとみる。鉄滓の出土から、時期は平安時代以降であろう。SK061 は SK060 に切られる楕円形の土坑。長軸長 126cm、残存幅 72cm を測る。本遺構も掘立柱建物 SB104 のほか、小穴に切られる。

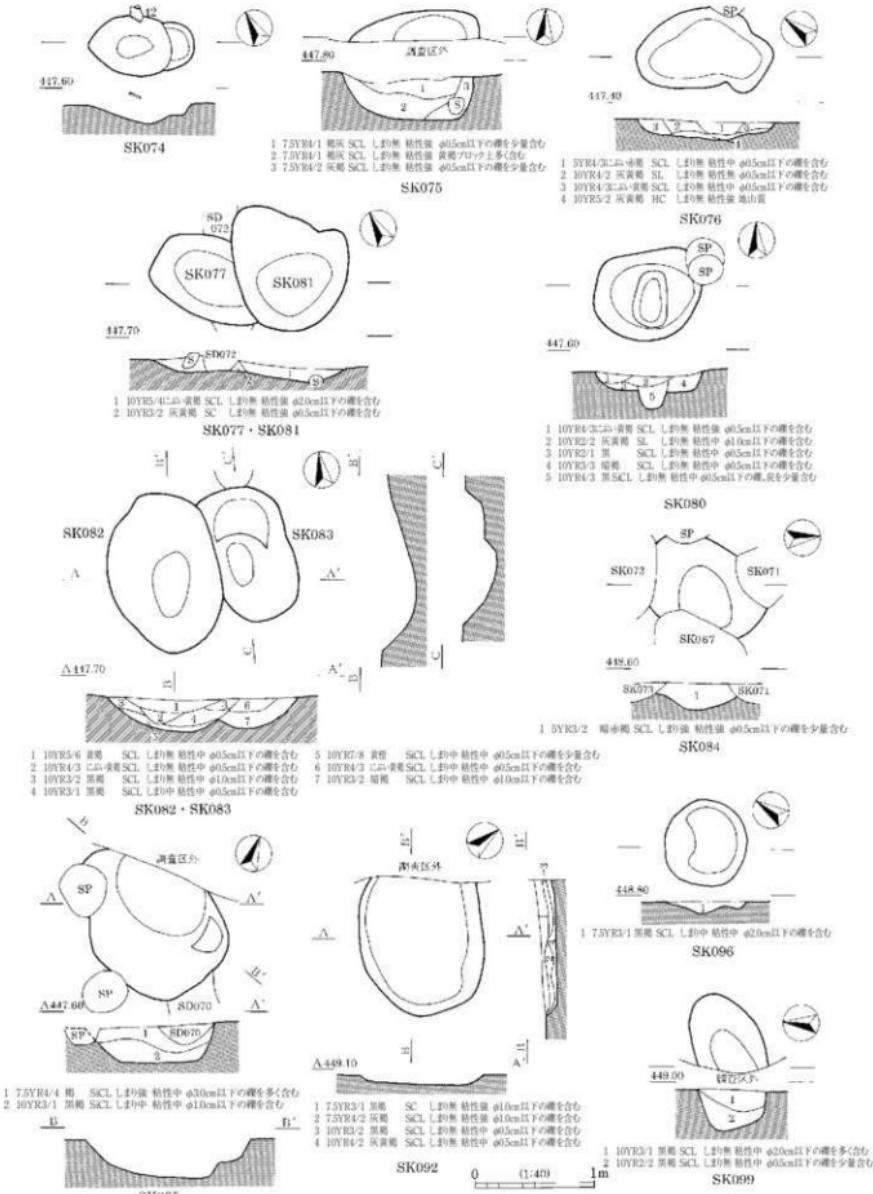
SK074 4区のグリッド DH23 に位置する不整楕円形の土坑。長径 89cm、幅 51cm を測る。付近を掘り下げ中に上層で須恵器甕の底部（43）が出土したため把握したが、検出レベルが低く、遺構の正確な形状はとらえることができなかった。時期は遺物から古墳時代後期以降と考えられる。

SK066・067・071・073・084・085 4区のグリッド DG28 付近を中心に位置する不整円形の土坑群である。それぞれ規模は長径で概ね 50 ~ 100 cm の範囲である。切り合いから、084 → 071・085 → SD070 → 073・067 → 066 の順に構築されたとみられる。出土遺物がほとんどなく、時期・性格は不明である。

SK082・083 4区のグリッド DH23 付近に位置する楕円形の土坑である。長径はそれぞれ 114cm



第23図 土坑(1)



第24図 土坑(2)

第3章 調査の成果

と135cm、SK082の幅は91cmである。SK083が先行し、082がその西側を切る。双方ともほぼ断面半円形に掘り窪められる。遺物の出土はなく、性格も不明である。中世の溝SD006の重複により、少なくともそれ以前の遺構と考えられる。

SK092 5区のグリッドDV08に位置する。北側は調査区外のため未調査となった。長径116cm、幅104cmの範囲を調査した。本遺構の検出面からの深さは13cmで、遺構上部の大半は造成により削平されているとみられる。底部は平滑で、壁は緩やかな立ち上がりをみせる。土層は4層にわかれ、やや粘性の強い埋土で埋まる。以上に加え、SZ094の中心付近に位置することから、当周溝墓の主体部の可能性が高い。

8 性格不明遺構（SX）

SX045・047・052・053（第25図、写真図版12）3区の方形周溝墓SZ100の内側、グリッドDG40付近に分布する性格不明遺構群である。いずれの遺構においても遺物はほぼ出土しておらず、時期は不明。付近の小穴も同様の性格とみて一括した。耕作による溝状の擾乱を部分的に受けている。SX047、052はSZ100の周溝とわずかに切り合うが、先後関係はとらえられなかった。SX045や053についてはSZ100の主体部が想定できる位置にあるが、いずれも平面不整形で、底部の凹凸が激しく深さが一定せず、人体の埋葬を行うための土坑とは考えられない。SX047やSX052は形状から土取り痕の可能性も考えられるが、この箇所の地山層は大礫が多く、粘土採取を目的としたものではなさそうである。SX045はSX052に切られる大型の遺構で、上層に焼けた砂礫の分布がみられ、埋土上層に炭化物が塊をなす箇所がある。土層堆積は概ねレンズ状である。

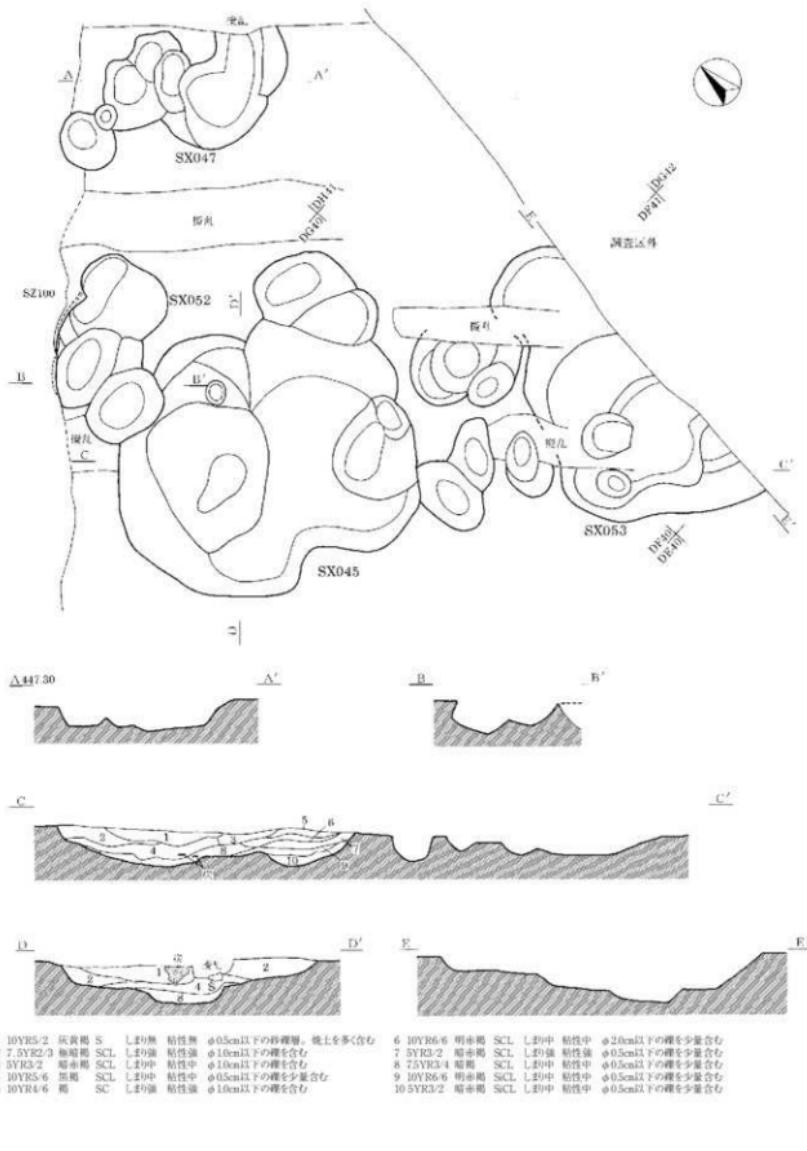
SX045の性格については、樹木の伐根後に着火したとされる事例が参考になる。長野市屋代跡群では、平面不整形で焼土塊や炭化物を多く伴う土坑が多数確認され、伐根後に不要な株や枝を焼却して埋め戻し、低地林を田畠として開発したと評価されている（寺内 1998）。屋代例は弥生中期に位置づく。SX045も上層に焼土を含んだ層があり、埋土の中にも炭化物が混じることから、樹木の株根によってできた穴で何らかの焼却行為を行ったとみることはできるが、その後の人為的な埋め戻しが支持できる土層堆積は認められなかった。樹木を伐採した後に焼却した可能性がある遺構として示しておきたい。

SX079（第26図）4区のグリッドDF25に位置する。170cm×133cmの範囲に調査が及んだ不整形の遺構で、南側は調査区外となる。埋土は自然堆積を示すが、全体的に粘性が強い。遺物は繩文土器、須恵器の細片があるが、性格は不明である。

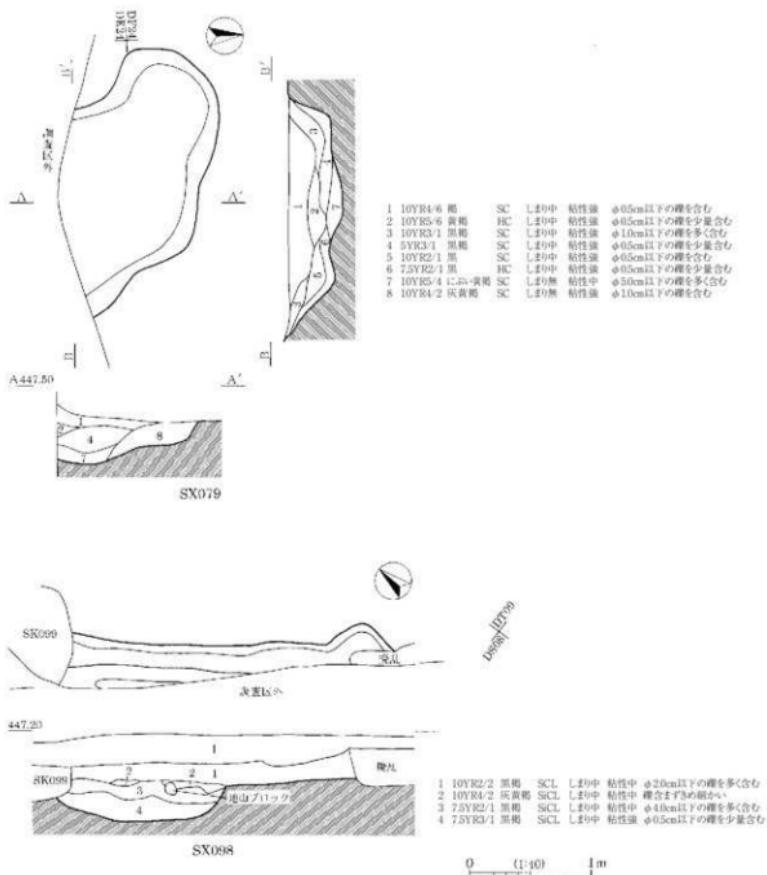
SX098（第26図）5区のグリッドDU07を中心に位置する。長さ2.8m、幅43cmの範囲を調査したが、遺構の大半は調査区外とみられる。土坑SK099に切られる。遺物はなく時期等も不明だが、堅穴建物の可能性がある。

9 小穴（SP）（第27～31図、第3・4表）

調査区の全体に分布するが、特に1区・4区に多い。小穴のうちSB104のみ掘立柱建物と認めたが、ほかの小穴も建物を構成していた柱穴の可能性がある。多くが時期不明である。ただし、3区には平安時代に埋没したとみられる大型遺構SX031の上から掘り込まれる小穴群（SP050・051、188～197）があり、少なくとも一部は中世に位置づく。



第25図 性格不明遺構(1)



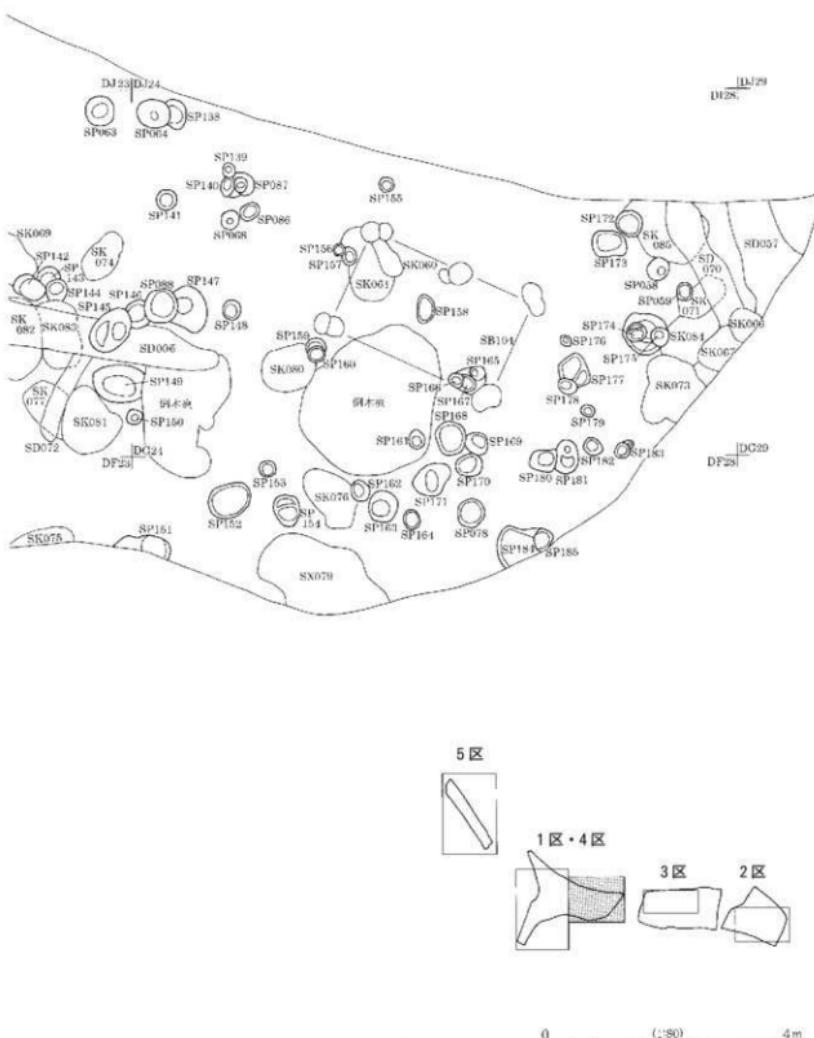
第26図 性格不明遺構(2)

10 その他

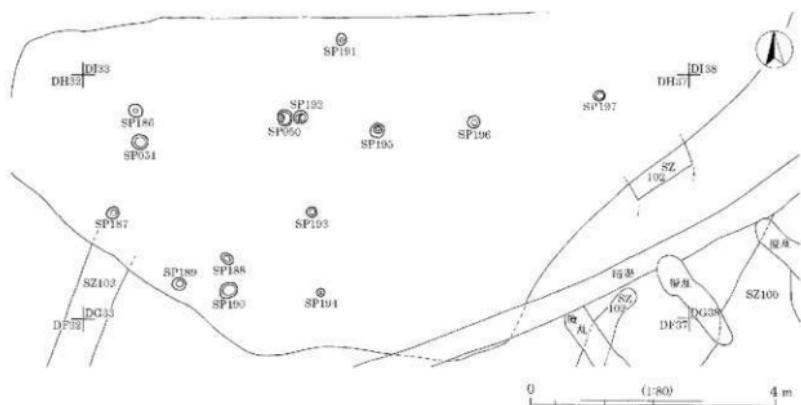
5区の表土直下で旧河道を検出した(第31図)。調査区の南側を北西から南東方向に縦断する流路で、砂礫が堆積する。耕作土である基本層序I層の直下で露出した。SZ103の上部を切る。5区の西側に設定した試掘トレンチ1でも砂礫の厚い堆積が確認された。近隣の住民によると、戦後までは西側の段丘崖側から調査区付近に川が流れ、5区の近辺で南に方向を変えて流れ下っていたとのことであった。既存の地番図を確認したところ、検出した河道に沿って蛇行した地割りが認められ、トレンチ1付近を通って5区の一部をかすめるように伸びていた。以上から、トレンチ1の調査地点は、5区で表出した流路の内側であったとみられる。地形的にみて自然流路とは考えにくい。土曾川の上流から取水され、現在は市道側溝を流れている井水の付け替え前の流路と考えられる。



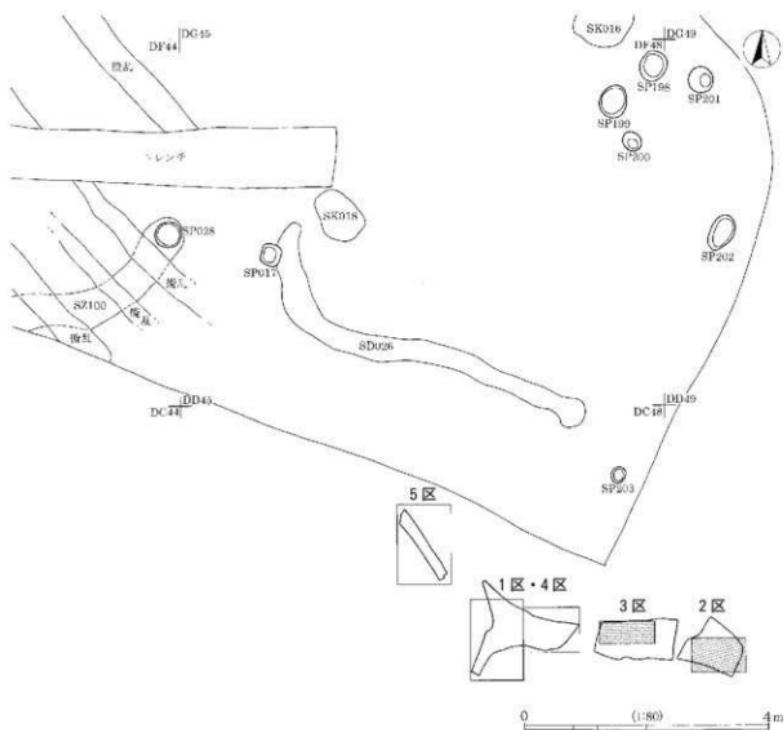
第27図 小穴(1)



第28図 小穴(2)

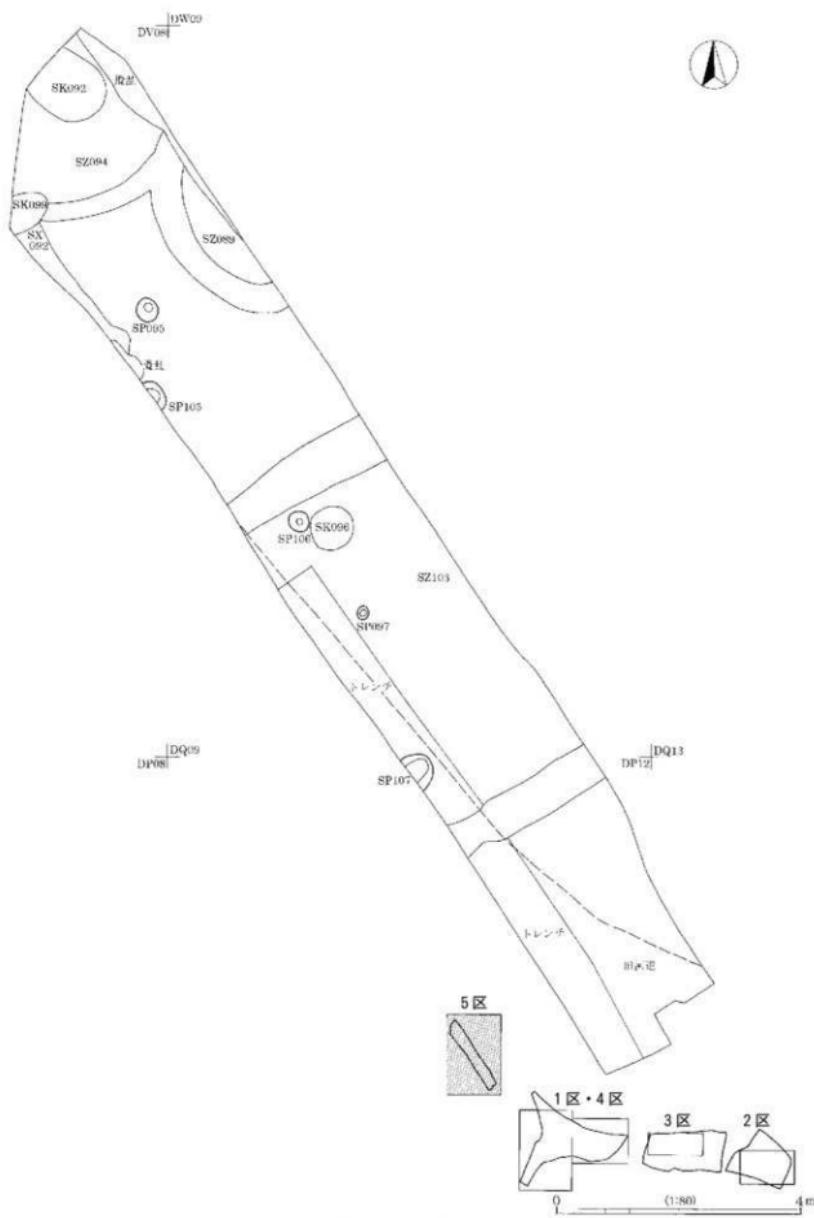


第29図 小穴(3)



第30図 小穴(4)

第3章 調査の成果



第31図 小穴(5)

第4節 遺物

遺構別に記載する。土器および鉄鎌の計測値等は、第2・5表に示した。なお、SX031から出土した雲珠の科学分析結果については、付録として本文末尾に提示した。

1 堪穴建物の出土遺物（第32図）

S1001 1・2は弥生土器の甕である。1は外形にやや球形化の傾向がみられ、径は体部中央よりやや上方で最大となる。器壁は底部も含めかなり薄い。文様はなく、外面全体が磨かれる。2は1と同様の特徴をもつ底部である。3は小型の直口壺。主住穴P1から出土した。胴部の大半を欠く。4は受け口口縁の壺。頸部から上が残る。L字状を呈する口縁端部に太いヘラによる刺突文がやや間隔をあけて刻まれ、頸部には上下幅の広い櫛描波状文が施される。以上の土器は弥生後期後半中島式の最終段階に位置づく。5は磨製石包丁。石材は珪質片岩である。形状は長方形に近い。片側の1/4程度を欠損する。残存長は6.9cm、幅は3.4cmを測る。刃部は両側からほぼ均等に研磨され、半月状に抉れる。2つの孔が芯々間2.4cmの間隔で両側から穿孔される。

S1002 6は須恵器の有台坏の底部である。小型で台形の高台が貼りつけられる。7は灰釉陶器の椀。高台は丸みを帯びた三角形を呈し、斜め下方に短く突き出す。8は灰釉椀の口縁部。端部がわずかに折られて外反する。これらは概ね9世紀後半から10世紀前半に比定される。8・9は埋土掘削中に出土した石器で、混入遺物と判断される。8は硬砂岩製の敲打器。9は乳白色の頁岩製の石匙である。

S1003 10は土師器の甕の口縁部で、頸部のくびれは緩い。古墳時代後期と考えられる。

2 大型遺構（SX031）の出土遺物

黒色の2層を中心に出土した古墳時代の遺物が主体である。上層（1層）では灰釉陶器、綠釉陶器、ロクロ調整土師器等があるが、2層でも平安時代遺物が古墳時代遺物に混じって出土している。下層（5層）では弥生～古墳時代の土器等が出土するが、量はごくわずかである。

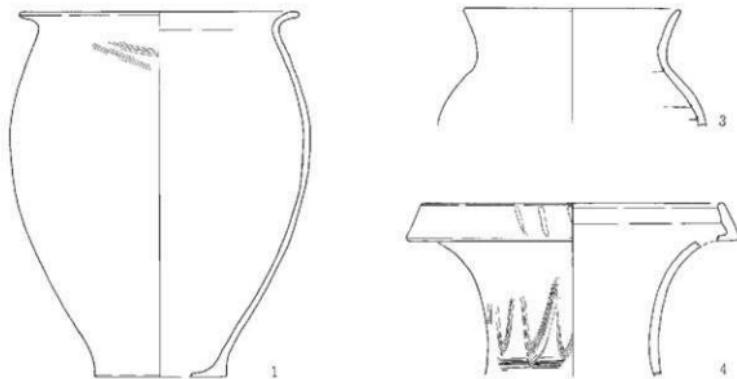
(1) 古墳時代の遺物（第33・34・35図）

主に黒色の2層から出土した。武器類、馬具、須恵器等の遺物は遺構全体から出土しているが、特に北西寄りに集中する。遺物の検出地点は石の分布する区域に多く、石を取り外す過程で出土したものが多くを占める。

武器 12は折れ曲がった片刃の鉄片で、鉄刀の切先付近とみられるが、鏽が厚く不鮮明である。13～17は長頭鎌である。計測値は表1に示した。5個体分出土し、すべてに棘状の茎部闊がつく。刃部が残る3点は、それぞれ柳葉式（13・14）、片刃式（15）である。13は両刃で、鐵身闊はナデ状を呈する。14は鐵身闊が直角で、14-1と14-2は接合しないが、取り上げ時の状況から同一個体とした。鐵身の側縁部がS字を描くもので、平林大樹による鉄鎌分類（平林 2013）の両刃Aa式にあたる。15もナデ状の鐵身闊をもつ片刃鎌で、同分類の片刃b式に該当する。

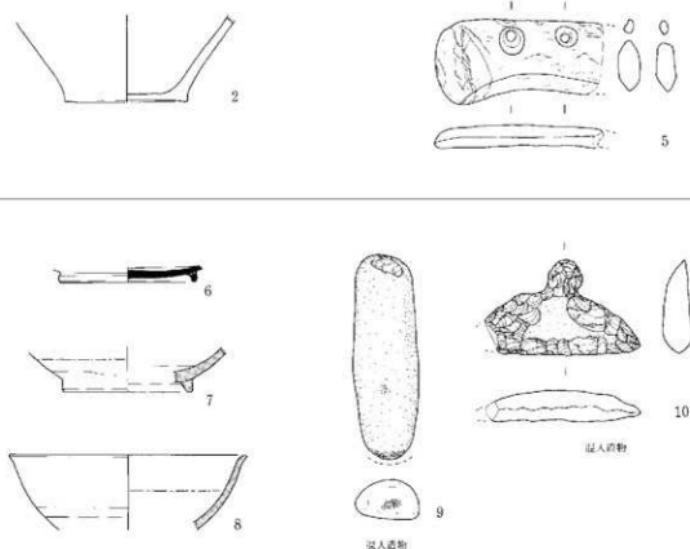
馬具 軸、雲珠、杏葉もしくは鏡板の破片がある。

軸 18は鉄製の軸で、輪金から脚部の途中まで残存する。全長7.1cm、幅4.5cmを測る。輪金部は分銅形の外形を呈し、刺金はつかない。輪金の中に貫入するよう厚手の有機質が残る。脚は輪金に巻き付き、2cm程度を残して折損する。座金具の痕跡はなく、脱落したかも不明である。19は軸の脚部先端で、先端を尖らせた細い板状の鉄材を使用し、J字状に湾曲する。

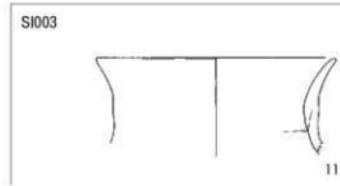


SI001

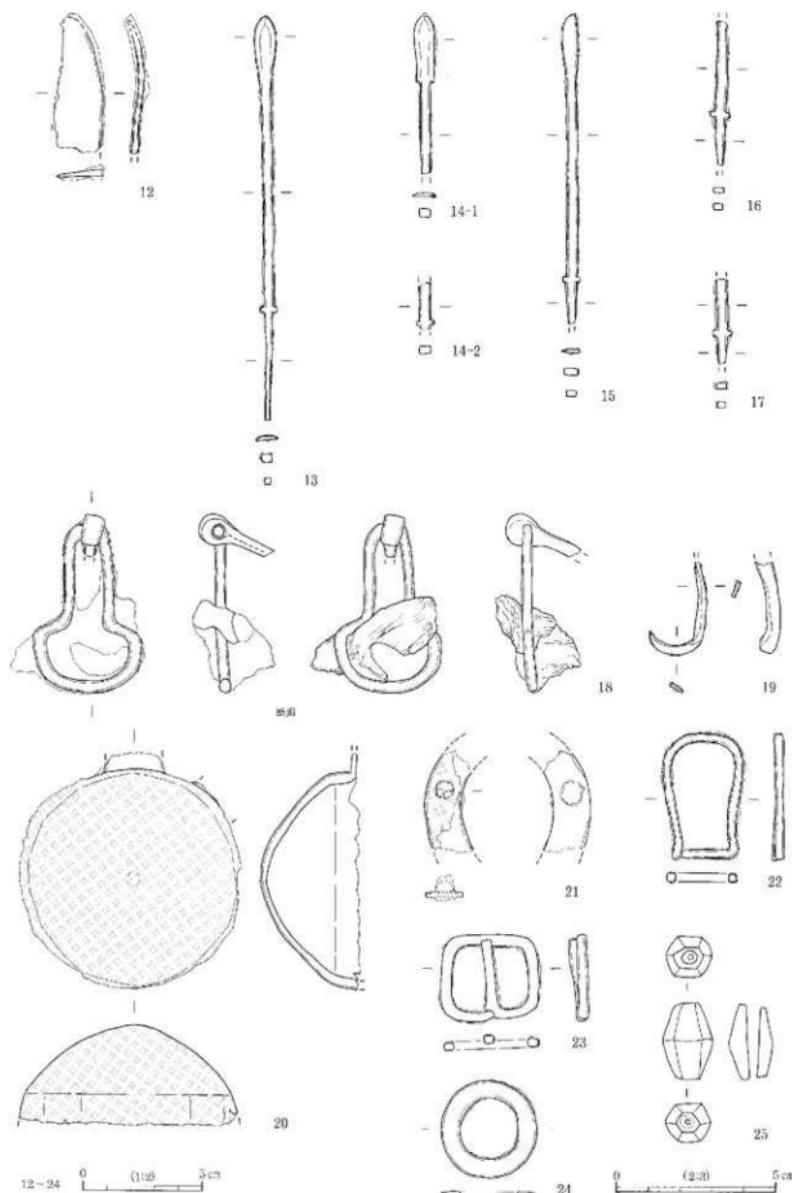
SI002



1-4, 6-9, 11
0 (1:3) 30 cm
5
10
0 (2:3) 5 cm



第32図 遺物(1)



第33図 遺物(2)

No.	形式	計測値(cm)									
		全長	錐身長	頭部長	茎部長	錐身幅	頭部幅	茎部幅	錐身厚	頭部厚	茎部厚
13	長頸柳葉瓶	16.9	3.0	9.4	4.5	0.9	0.4	0.3	0.2	0.4	0.3
14	長頸柳葉瓶	(6.6)	(2.3)	(4.3)	—	0.9	0.4	0.3	0.2	0.4	0.3
15	長頸片刃鏡	(13.0)	2.5	8.5	(2.0)	0.7	0.4	0.4	0.15	0.3	0.3
16	長頸鏡(茎部)	(6.0)	—	(3.9)	(2.1)	—	0.4	0.4	—	0.25	0.25
17	長頸鏡(茎部)	(3.6)	—	(2.2)	(1.4)	—	0.4	0.4	—	0.3	0.3

※()内の値は残存値

第1表 鉄鏡計測表

雲珠 20は鉄地金銅装の雲珠である。全体形は鉢状を呈し、中腹に緩慢な稜をつける。鉢部の径は9.3cm、残存長は4.1cmを測る。頂部付近はドーム状に打ち出され、飾金具等はつかない。稜より下部は平面多角形に整形された形跡が認められ、直上から見て完全な円形とならない。脚部は一部を除いてほとんど残らないが、痕跡から8脚と判断される。鍍金は約半分が剥落しているが、鉢部の全面に施されていたと考えられる。鍍金の地板としての銅板は肉眼ではほとんど確認できないが、蛍光X線分析により銅成分を検出している。また、顕微鏡の観察により金鍍金の表面に微細な擦痕が確認され、鍍金後の仕上げ段階で付いた可能性がある。

杏葉あるいは鏡板 21は鉄地金銅張の破片で、心葉形杏葉もしくは同種の鏡板の縁金の破片と判断した。湾曲する幅約1.5cmの板材の片面に金銅板が張られる。この面に直径0.6cmの金銅装の鉢が1つ打たれているが、鋶で全体がふくれている。裏側の面には別の部材が剥落した痕跡がみられ、不整形に潰れた新脚が露出する。

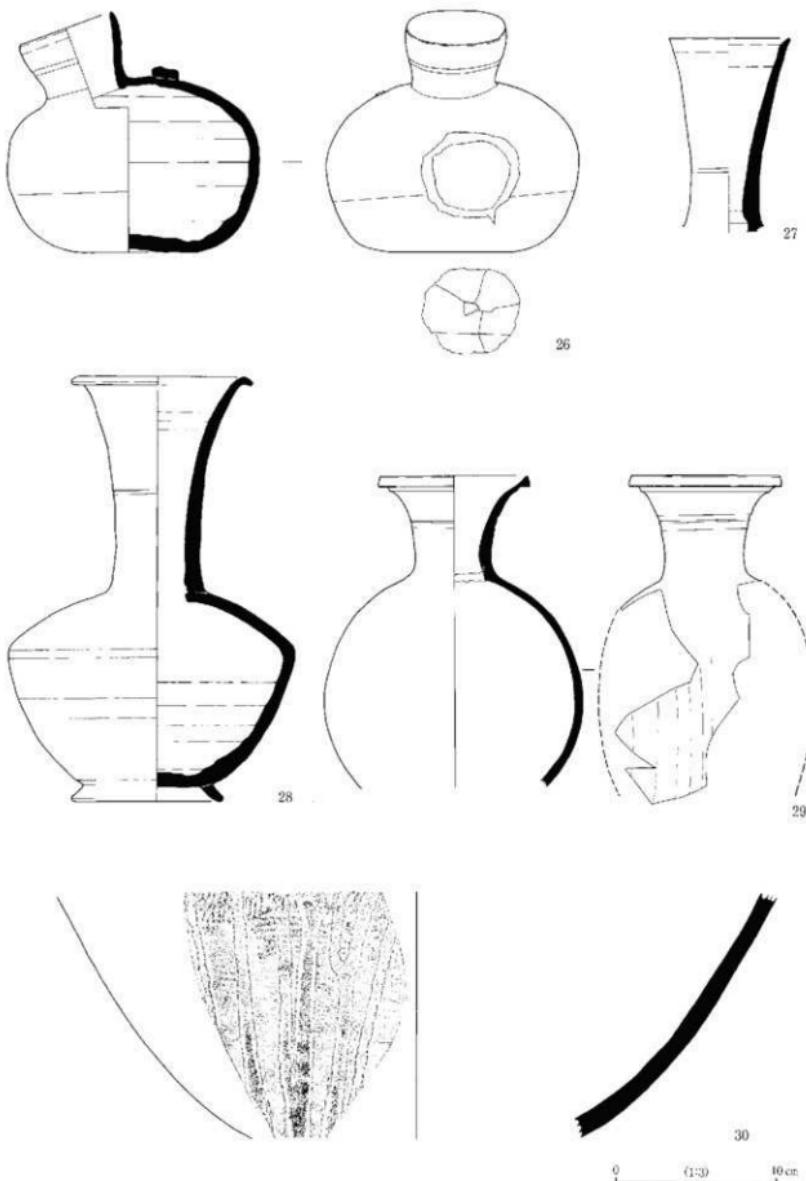
鉗具 22と23の2点出土した。1本の鉄の棒材を曲げ、一周させることで輪金をつくりだしている。22は輪金のみで刺金を欠く。23は輪金から刺金まで一体造りである。これらは馬具を構成していく可能性がある。

環状鉄製品 24は1点のみ出土した鉄製の円環で、外直径4.0cmを測り、厚さ1mm程度の薄く扁平な材を使用する。表面に金銅板が張られた痕跡等ではなく、有機質も残存しない。

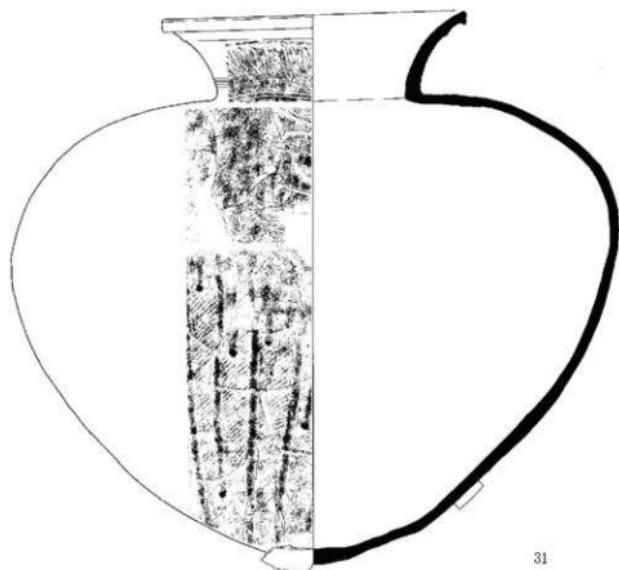
装身具 25の切子玉1点が出土した。水晶製。長さ2.4cm、横幅1.6cmを測る。横面、穿孔面に対してそれぞれ六角形に面をとる。片面穿孔である。

須恵器 平瓶1、長頸瓶2、フラスコ形瓶1、甌3を図示した。これら以外にも別個体の細片がある。26の平瓶は、丸みを帯びた逆台形の体部に短い口頸部がつく。胎土は白色で、上半に自然釉が薄くかかる。ロクロ成形後、口に粘土を充填して閉じた後、中央からずれた箇所に新たに穿孔し、別造りの口頸部を斜めにはめこんでいる。肩の頂部にボタン状の部材がつく。体部中央付近に6.0cm×4.1cmほど の不整円形孔が穿たれる。出土時に穿孔箇所の破片は内部に入り込んでいた。破片の外面中央部に銳利な器具で突かれて抉れた部分があり、外側から穿たれたことがわかる。

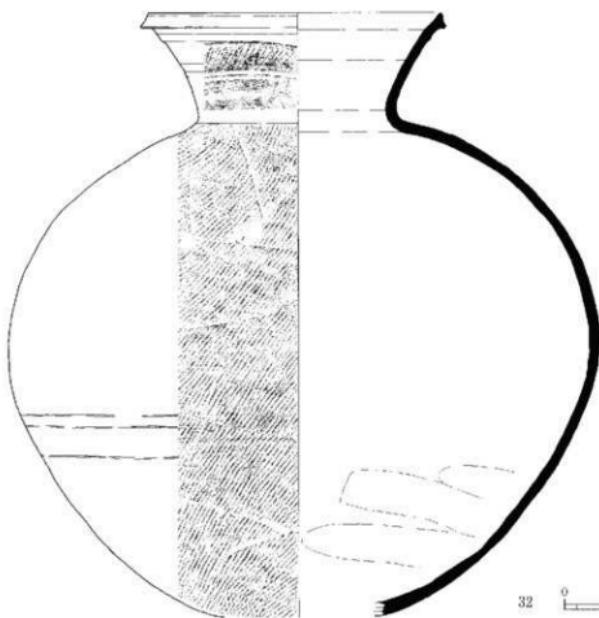
27・28は長頸瓶である。27は頸部のみ。口縁端部を弱く外反させ、頸部の下方寄りに1条の横線がめぐる。全体に薄く自然釉がかかり、外面は暗赤褐色を呈する。28は台付長頸瓶で、一部欠損するものの完形に復元できる。肩は突出するが、角に丸みを帯びて折れる。口縁端部を強く外反させ、頸部に2条の横線が入る。高台はハの字状に開く。胎土は暗青灰色で、白色石粒を多く含んでいる。29はフラスコ形瓶である。全体に暗緑色の自然釉がかかり、底部付近まで垂れ下る。体部は球形に近い形態で、回転カキメにより仕上げがされる。頸部には2条の横線がめぐり、口縁端部直下に小さい段がつく。体部以下は過半が欠損し、接合しない細片が多い。甌は3個体出土した。30と32は北西寄りの疊集中箇所から、31は南寄りで破壊された位置を保って出土した。30は底部に近い体部の破片で、外面は自然釉の下に薄くタタキの痕跡が残る。内面は無文で、当道具の痕



第34図 遺物(3)



31



32

0 (1:4) 10 cm

第35図 遺物(4)

跡はない。31は肩から底部近くにかけて深緑色の自然釉が垂れ下がる。口縁端部はわずかに垂下し、やや強く外反する。頸部に波状文と3条の横線が施される。肩は大きく張り出す。体部表面にはタタキが認められるが、内面に当て具の痕跡は認められない。底部には破片が窓着する。32も甕で、口縁部の開きはやや小さい。頸部に間隔の狭い波状文が連続し、下に1条の横線がめぐる。肩の張り出しが弱く、胸部は31に比べて球形に近い。外面は若干の自然釉に覆われ、タタキが全体を覆う。体部を詳細に観察すると、タタキの上に非常に微細な横線が数条あり、体部を一周しているのがかるうとして視認できる。内部に当て具痕はまったく視認できないが、底部付近にシャープな削りの痕跡が残る。

(2) 平安時代の遺物（第36図）

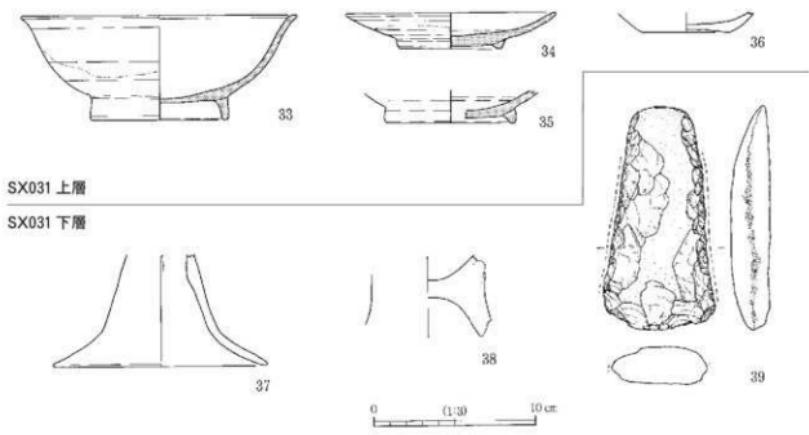
33～36は主として埋土上層（1・2層）から出土した灰釉陶器、ロクロ調整土師器である。33の深碗は胎土が非常に緻密で硬質に仕上がる。口縁端部はわずかに外反し、腰から底部にかけて削りが入念に施される。釉薬はハケ塗りとみられる。これらは9世紀末～10世紀前半の所産とみる。35・36の皿は釉薬が漬けがけされ、短小化し丸みを帯びた高台がつく。10世紀後半頃か。36はロクロ調整土師器の底部で、糸切り痕があるが摩耗により不鮮明である。図化していないが、このほかに綠釉陶器の細片がある（写真図版20）。

(3) その他の遺物（第36図）

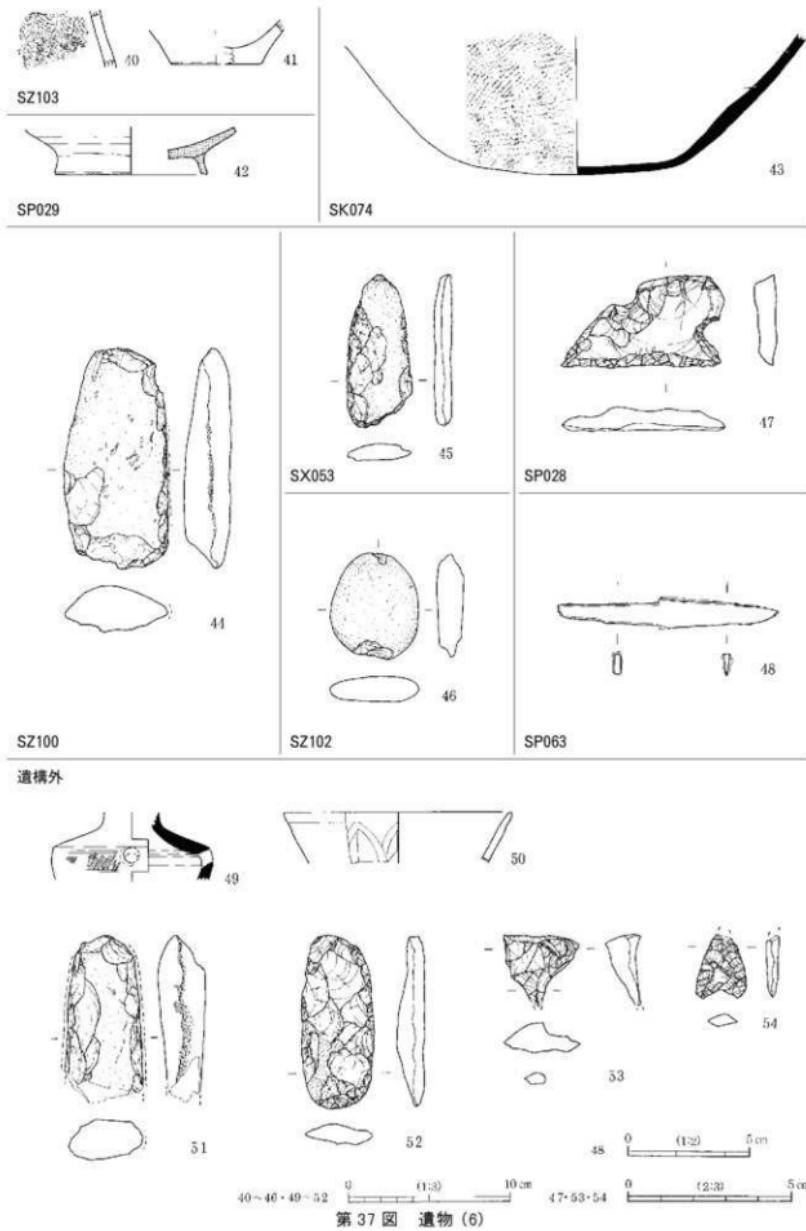
37～39は最下層（4層）から出土した遺物で、造構構築以前の遺物とみられる。37は高坏の脚部で、ラッパ状に開く。胎土は白色に近い黄褐色であり、当地域外から搬入された可能性がある。38は器台の身と脚部の接合部か。これらは弥生後期～古墳前期の所産であろう。39は硬砂岩製の打製石斧である。

3 周溝墓の出土遺物（第37図）

周溝墓出土遺物はごく微量であった。SZ103の周溝から弥生土器片が出土した。40は外面に2条の波状文が施された甕の体部で、弥生時代後期に位置づく。41は同じく甕の底部。44はSZ100



第36図 遺物(5)



出土の硬砂岩製の打製石斧である。46はSZ102の西周溝から出土した石錐で、円礫の両端を打ち欠いている。硬砂岩製である。

4 土坑・小穴の出土遺物（第37図）

42はSP029出土の灰釉楕の底部である。高台の端部に微細な打ち欠き痕がある。胎土や焼成はSX031上層出土の33と類似し、非常に緻密で硬質を特徴とする。年代は9世紀後半～10世紀初頭頃か。43はSK074の上部で出土した須恵器甕の底部である。外面にタタキが施されるが、内面は無文となる。45はSX053出土の緑色岩製の打製石斧、47はSP028出土の石匙で、チャート製である。48の刀子はSP063の遺構上層から出土した。全長9.0cmを測る。関は直角である。このほか、図化していないが、SK060の上層で鉄滓が1点出土している。

5 遺構外出土遺物（第37図）

49は4区検出中出土の須恵器甕の破片である。体部上半から頭部の一部まで残る。体部に横線で区画された文様帯がめぐり、斜線が連続する。古墳時代後期後半に位置づく。50は1区・4区の排土中出土の龍泉窯系青磁碗の破片で、体部に花弁様の文様が連続する。13世紀代に比定される。51・52は双方とも硬砂岩製の打製石斧である。53は2区で検出したチャート剥片、54は黒曜石製の石鏃で、縄文時代の遺物である。

遺構No.	位置 (グリッド)	長軸長 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺物等
SK012	DE17	(76)	(43)	27	
SK013	DE17	112	36	21	
SK016	DG49・DF48	100	67	24	
SK018	DE46	90	62	23	
SK046	DF39・DF40	124	79	14	
SK048	DG41	(54)	76	21	土器細片
SK055	DF35・DF36	(68)	115	22	土器細片
SK060	DH25・DH26	(69)	34	24	鉄滓
SK061	DH25・DH26	126	(72)	23	土師器片
SK066	DH29・DG28	(53)	(46)	22	須恵器片
SK067	DG28・DH28	(70)	(59)	28	
SK069	DH22・DH23	101	64	18	土師器片
SK071	DH28	91	46	22	
SK073	DG28	117	(98)	15	須恵器、土師器、 縄文土器片

※()内の値は残存値を表す。

遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	長径 (cm)	深さ (cm)	遺物等
SK074	DH23	89	51	25	
SK075	DF23	111	(24)	41	
SK076	DF25	115	67	21	
SK077	DG23	(74)	68	19	
SK080	DG25	91	74	43	
SK081	DG23	114	102	19	
SK082	DH22・DH23	(135)	(91)	36	土師器片
SK083	DG23・DH23	(114)	(74)	25	
SK084	DG28・DH29	(109)	76	23	土器細片
SK085	DH28・DI28	142	(103)	33	弥生土器片
SK092	DV08・DV07	(116)	104	13	
SK096	DR10・DS10	73	70	12	
SK099	DU07・DU08	(72)	60	35	土器細片

第2表 土坑観察表

第3章 調査の成果

遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物等	遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物等
SP014	DG22	26	20	10		SP135	DC17	33	28	41	
SP017	DE44	36	32	12	弥生土器片	SP136	DB17	22	19	23	
SP028	DE45	34	30	16	土器片	SP137	DB17	28	28	18	
SP029	DE17	20	20	35	灰陶陶器片	SP138	DI24	52	(28)	14	
SP050	DG33	26	20	20		SP139	DI24	26	22	8	
SP051	DG32	26	24	10		SP140	DI24	(32)	22	9	
SP058	DH27	40	34	14	須恵器片	SP141	DI24	34	32	12	
SP059	DH27	30	24	16	須恵器片	SP142	DH23	54	33	12	
SP063	DI23	48	48	11		SP143	DH23	38	(30)	12	
SP064	DI24	56	48	30		SP144	DH23	(34)	34	10	
SP068	DH24	32	30	13		SP145	DH23	80	56	26	
SP078	DF26	48	46	14		SP146	DH24	48	(32)	11	
SP086	DH24・DI24	34	28	5	須恵器片	SP147	DH24	80	(50)	23	
SP087	DI24	40	32	38	弥生土器片	SP148	DH24	32	30	11	
SP088	DH24	58	56	36	國文土器片	SP149	DG23	84	62	30	
SP105	DS08	56	(18)	9		SP150	DG23	26	24	23	
SP106	DR10	38	31	25		SP151	DF24	93	60	20	
SP107	DP11	(40)	62	15		SP152	DF24	72	54	9	
SP108	DK19	20	20	10		SP153	DF25	26	26	14	
SP109	DJ19	21	21	5		SP154	DF25	53	40	16	
SP110	DJ19	31	26	24		SP155	DI26	24	24	24	
SP111	DI19	22	21	27		SP156	DH25	18	18	7	
SP112	DI19	32	28	12		SP157	DH25	32	24	36	
SP113	DG22	36	36	28		SP158	DH26	48	28	5	
SP114	DG22	(40)	23	16		SP159	DG25	32	(12)	11	
SP115	DG19	34	26	23		SP160	DG25	26	24	24	
SP116	DG20	73	50	59		SP161	DG26	30	24	27	
SP117	DF20	23	22	8		SP162	DF25	34	30	21	
SP118	DF20	33	28	26		SP163	DF26	52	48	18	
SP119	DF20	28	28	13		SP164	DF26	32	24	25	
SP120	DF20	25	23	45		SP165	DG26	24	21	14	
SP121	DF20	31	28	19		SP166	DG26	21	20	13	
SP122	DF19	22	20	11		SP167	DG26	(24)	26	17	
SP123	DF18	24	22	34		SP168	DG26	56	50	9	
SP124	DF18	23	20	13		SP169	DG26	60	40	16	
SP125	DF18	37	32	10		SP170	DF26	46	38	15	
SP126	DF18	24	20	11		SP171	DF26	68	51	16	
SP127	DF18	44	26	12		SP172	DH28	46	40	16	
SP128	DF18	32	21	19		SP173	DH27	56	44	23	
SP129	DF18	53	38	14		SP174	DG28	33	30	31	
SP130	DF19	32	20	26		SP175	DG28	33	28	39	
SP131	DF17	24	22	38		SP176	DG27	21	14	8	
SP132	DE17	25	20	31		SP177	DG27	54	48	6	
SP133	DE18	33	23	21		SP178	DG27	33	26	14	
SP134	DE19	22	20	14		SP179	DG27	24	18	4	

※()内の値は推定値を表す

第3表 小穴観察表(1)

遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	特記事項	遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	長径 (cm)	深さ (cm)	特記事項
SP180	DF27	44	34	20		SP192	DH34	22	20	21	
SP181	DF27	56	34	18		SP193	DG34	18	15	14	
SP182	DG27	32	26	11		SP194	DG34	12	12	16	
SP183	DG28	32	25	14		SP195	DH35	25	23	13	
SP184	DF27	(64)	(60)	6		SP196	DH36	22	20	23	
SP185	DF27	38	30	12		SP197	DH37	18	14	21	
SP186	DH33	23	22	9		SP198	DF48	48	45	10	
SP187	DG33	20	18	28		SP199	DF48	54	46	11	
SP188	DG34	24	16	11		SP200	DF48	34	28	13	
SP189	DG33	21	18	28		SP201	DF49	44	40	14	
SP190	DG34	30	24	15		SP202	DE49	60	40	7	
SP191	DI35	20	18	9		SP203	DC48	28	24	4	

※()内の値は既存値を表す。

第4表 小穴観察表(2)

遺構	図版 No.	器種	法量(cm)		調整		胎土		
			口径	底部径	器高	外面			
SI001	1	弥生土器	甕	16.8 (7.9)	22.0	ミ	ナ	0.1~0.3cm白色粒多く、0.1~0.3cm赤褐色粒を含む。	
#	2	弥生土器	甕	(18.0)	—	ミ	ナ	0.1cm以下の白色粒をわずかに含む。	
#	3	弥生土器	壺	14.2	—	—	—	0.1~0.3cm白色粒を多く含む。	
#	4	弥生土器	壺	13.0	—	—	ナ	0.1~0.3cm白色粒を含む。	
SI002	5	須恵器	有台坏	—	8.4	—	—	黒色微粒を多く含む。	
#	7	灰釉陶器	碗	—	(7.8)	—	—	黒色微粒をわずかに含む。	
#	8	灰釉陶器	深碗	(14.4)	—	—	ケ	黒色微粒をわずかに含む。	
SI003	11	土師器	甕	—	7.5	—	—	0.1~0.5cm白色粒多く含む。	
SX031	26	須恵器	平底	6.1	8.0	14.9	—	—	0.1cm以下の白色粒わずかに、黒色微粒を含む。
#	27	須恵器	長颈瓶	7.4	—	—	—	—	0.2cm以下の白色粒・黑色微粒を多く含む。
#	28	須恵器	長颈瓶	11.0	9.2	26.5	—	—	0.1~0.4cmの白色粒を多く含む。
#	29	須恵器	フラスコ瓶	9.1	—	—	—	—	0.1cm以下の白色粒わずかに含む。
#	30	須恵器	甕	—	—	タ	—	—	0.1cm以下の白色粒・黑色微粒をわずかも含む。
#	31	須恵器	甕	24.8	0	45.0	タ	—	0.1cm以下の白色粒わずかに、黒色微粒を多く含む。
#	32	須恵器	甕	24.0	(0)	(49.5)	タ	ケ	黒色微粒をわずかに含む。
#	33	灰釉陶器	深碗	16.8	8.3	6.4	ケ	—	黒色微粒を含む。
#	34	灰釉陶器	皿	12.7	6.4	2.3	—	—	黒色微粒を含む。
#	35	灰釉陶器	皿	—	(7.5)	—	—	—	黒色微粒を含む。
#	36	土師器	坏	—	5.4	—	—	—	0.2cm以下の白色粒・赤褐色粒を含む。
#	37	弥生土器	高坏	—	12.9	—	—	—	0.1cmの白色粒をわずかに含む。
#	38	弥生土器	器台?	—	—	—	—	—	0.1~0.5cmの白色粒を多く含む。
SZ103	40	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	0.1~0.3cm白色粒を含む。
#	41	弥生土器	甕	—	—	—	—	—	0.1~0.3cm白色粒を含む。
SP029	42	灰釉陶器	碗	—	9.2	—	ケ	—	黒色微粒をわずかに含む。
SP074	43	須恵器	甕	—	12.0	—	タ	—	0.1~0.3cm白色粒を多く含む。
遺構外	49	須恵器	甕	—	—	—	—	—	黒色微粒をわずかに含む。
#	50	青磁	碗	—	(13.8)	—	—	—	—

単法量の()は復元値を表す。調整の片仮名表記は、タ:タタキ、ミ:ミガキ、ケ:ケズリ、ナ:ナデを表す。

第5表 出土土器観察表

第4章 総括

リニア中央新幹線長野県駅周辺整備の一環として行われた今次調査では、幅広い時代の遺構・遺物を検出し、当遺跡の性格が明らかとなった。そのなかで、古墳時代の遺物が多数出土したSX031は大きな成果であり、その性格について考察する。最後に全体の調査成果を総合し、調査のまとめとしたい。

第1節 大型遺構 SX031について

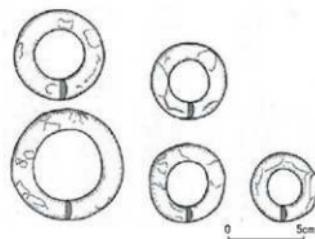
遺構の性格 当遺構は3区で確認された遺構である。調査が及んだのは遺構全体の南側の一部と考えられる。古墳時代の遺物が多数出土した。

第2章で触れたとおり、昭和30年（1955）刊行の『下伊那史』第2巻に「塚田」について記載があり、調査区付近に石室墳が埋没した可能性が指摘されている。SX031は全体的に円弧状の外形を呈する大型の掘り込み遺構で、埋土から古墳時代の遺物が多数検出されている。したがって、SX031は古墳の周溝であり、『下伊那史』の記録に残る「塚田」、すなわち飯沼塚田古墳の一部と考えられる。ただし、調査範囲内で墳丘の立ち上がりは認められなかったため、墳形を特定するには至らなかった。

遺構西側を中心に検出された巨礫群に規則的な並びではなく、礫の上下や間から馬具や鉄鏃、須恵器等が出土した。これらはすべて無加工の川原石であり、葺石あるいは石室用材の可能性が考えられるが、当地域の後期古墳で一般的な葺石よりも大型のものが多い。どちらかといえば、墳裾に配置される基底石の大きさに近いが、古墳の破壊が行われ、基底石のみが周溝内の一地点に集められているのはやや不自然である。断言はできないが、SX031の巨礫群は飯沼塚田古墳の石室に使用されていた岩石である蓋然性が高い。いずれにせよ、原位置をとどめるものではなく、古墳時代遺物と同レベルから直上の層にかけて平安時代の遺物が出土することから、当該期に何らかの要因で破壊され、SX031（周溝）に石室用材の巨礫と副葬品とが混在した状態で埋没したと考えられる。

出土遺物の特徴と年代 馬具、鉄鏃、須恵器等は飯沼塚田古墳に副葬されていた遺物とみられる。馬具は鞍（18）があり、鞍を構成していたことがわかる。輪金は刺金がない単純な形態である。また、金銅製の鉢状雲珠（20）は稜の退化と小型化が進行しており、心葉形の杏葉もしくは鏡板とみられる金銅張の破片（21）には、大型化した鉢がつく。これらの特徴から、馬具類は宮代榮一の編年におけるⅦ期、内山敏行の終末期1段階に位置づく（宮代 1996、内山 1996）。したがって、当古墳には7世紀前半に相当する年代の馬具が少なくとも1組は埋納されていたと考えられる。このほか、環状鉄製品（24）は

扁平な鉄の素環である。有機質は残存せず、他の部品との連結方法等は復元しえない。平面形態的には、轡をともなわない簡素な馬装に用いられる「無口頭絡」とされる辻金具と類似し、群馬県高崎市親音塚古墳などで報告されている（宮代 2016）。一方、栃木県下石橋愛宕塚古墳では、大きさの異なる鉄地金銅張の環状製品一式の出土例がある（第38図）。これらはいずれも馬具の一種として認識されているものの、使用方法の特定には至っていない。また、本例はそれらに比べ薄く扁平であり、強度にはやや不安がある。以上により、環状鉄製品の評価については、馬具の可能性がある一部品として示し、今後の研究に託したい。

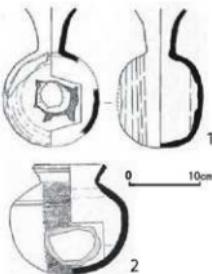


第38図 下石橋愛宕塚古墳出土環状鉄
地金銅張製品

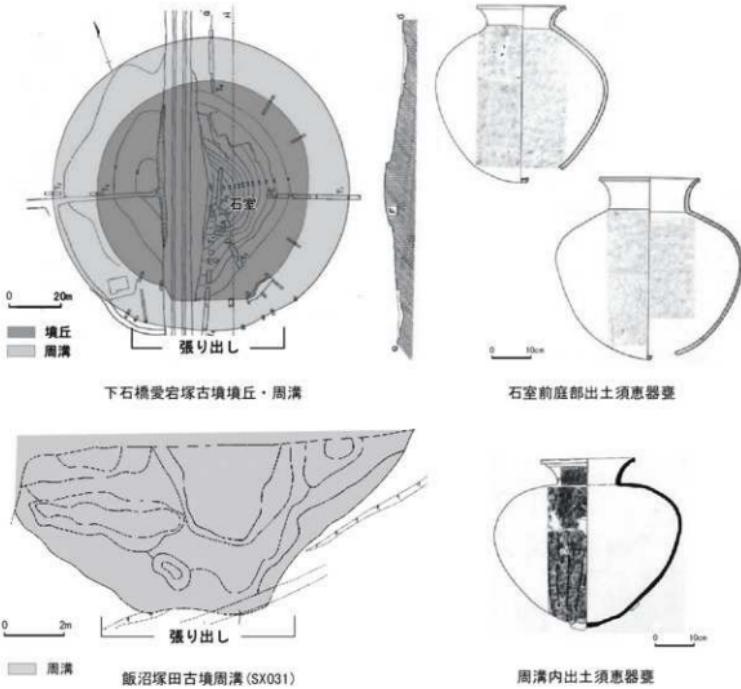
鉄鏃は平林大樹のII期、III期の鏃がそれぞれ含まれる。年代は信濃の鉄鏃編年において、7世紀第1～第2四半期に比定でき（平林 2013、中村 2015）、概ね馬具と並行する時期の所産である。鏃の時期区分に基づけば、複数回の埋葬行為も想定しうるもの、後期・終末期鏃は一括りの担保が難しく、個々の型式に想定される年代に幅があり、この段階における追葬の存否は不明である。

須恵器は概ね7世紀初頭前に位置づけられる。ただし、台付長頸瓶（28）は7世紀後葉～末頃の所産で、他の須恵器と明確に時期差を認めることができる。甕は3個体が確認できた。いずれも内面に当て具痕が一切残らず、32は胴部に微細な回線が巡る。これらは当該期における愛知県猿投窯産の製品の特徴である（角脇 2006・藤野 2013ほか）。フラスコ形瓶（29）も頭部の長さや

二重の横線、口縁端部下の段が小さいといった特徴から猿投窯と考えられる⁽¹⁾。一方で平瓶（26）は白色度の高い胎土からなり、頂部にボタン様の部品が付くもので、猿投・湖西窯以外で生産された製品とみられる。この個体の体部への穿孔は、打ち欠いた際の破片まで残り、儀礼痕としても興味深い。飯田市域の古墳における須恵器の体部への穿孔例は、川路地区の久保田1号古墳周溝内出土の短頸甕（第39図-1）や猿魔王塚古墳出土のフラスコ形瓶（第39図-2）がある。まだ類例は少ないが、地域内で



1:猿魔王塚古墳 2:久保田1号古墳
第39図 穿孔のある須恵器



第40図 下石橋愛宕塚古墳と飯沼塚田古墳

須恵器の穿孔を伴う儀礼が共通して行われていたようである。

以上の各遺物の年代観から、当古墳の築造・初葬は7世紀初頭を中心とする時期であり、その後も少なくとも7世紀末頃までは利用されていたと考えられる。

張り出しと土器供獻 SX031は古墳の周溝であり、大半は未調査であるが、調査結果から円形に近い形状に復元しうる。ただし、南側は円弧を描かず台形状に張り出す点で、通有の円墳にみられる周溝と異なる。当地域の後期古墳でこのような平面形の周溝は調査事例がない。広域的にみれば、北関東における1例として、栃木県下石橋愛宕塚古墳がある(第40図)。報告によると、当古墳は墳丘長84mを測る三段築成の大型円墳で、墳丘の南側で約5m方形に突出する箇所があり、それに対応して周溝もわずかに南側へ張り出す。飯沼塚田古墳については墳丘の張り出しの有無は調査が及ばず確認できなかつたものの、周溝の南側が張り出すという点で下石橋愛宕塚古墳に類する可能性がある。

張り出しの性格を考えるうえで、須恵器甕(31)とその出土位置が目を引く。周溝内で破碎された後に自然埋没しており、原位置を保つ遺物である。この甕が張り出し付近の周溝内から出土したことを重視すれば、張り出しが祭祀を行う場としての性格を有していたことも想定しうる。なお、下石橋愛宕塚古墳では須恵器甕が石室の前庭部付近や墳丘各所に供獻されている。

以上のような例があるものの、当古墳周溝の張り出しが関東の影響によるものかを断言することはできない。一方で、出土した須恵器に猿投系が含まれることから、東海地方との交流も看取される。山間部である飯田盆地への器物の運搬には、産地はもとより運搬に使用された経路や手段の想定が不可欠である。高橋透は6~7世紀の東海産須恵器の流通について考察するなかで、シナノにおける尾張産須恵器の出土量のピークが7世紀第2四半期~後半にあることを指摘し、天竜川などの河川を利用した搬入を想定した(高橋 2015)。これに加え、令制東山道の前身にあたる内陸交通路(いわゆる古東山道)も物資の流通に関わっていたことは十分に考えられる。当古墳の須恵器類も、7世紀のはじめに活発化し始めた尾張地方との交流によって、いずれかの内陸交通ルートを通じてもたらされたとみられる。

以上のような広域的な影響関係については飯田の古墳を考えるうえで欠かせない視点だが、実態はまだ十分に解明されているとはいがたい。いずれにせよ、東西各地域との関係がそれぞれ推察でき、古来より東西交通の結節点である飯田という地域の特質を端的に表す成果といえる。

周辺の集落・古墳との関係 土曾川を挟んだ西浦遺跡の対岸の座光寺地区には3基からなるナギジリ古墳群、石原田古墳などの小規模な古墳が分布し、古墳時代後期の主要な墓域としてとらえうる。土曾川からやや離れる石塚1号・2号古墳は大型の無袖式横穴式石室をもち、座光寺地区を一望する高所に立地する、古墳時代後期中葉~後葉にかけての座光寺の首長墓とみられる。対して、それより下層の集団は土曾川流域の谷間を墓域として志向したようである。これらのうち、ナギジリ1号古墳が飯沼塚田古墳と同時期の墳墓であろう。当古墳は石室の調査により得られた遺物の年代幅から、6世紀末の築造以後8世紀代までの利用が考えられる。土曾川左岸に分布する他の古墳についても各記録から、後期から終末期を中心とする可能性が高い。これに対して、飯沼塚田古墳は谷間を出て開けた右岸段丘上にあり、母体となった集落は土曾川右岸(上郷地区北部)の集落であると考えるのが自然である。その候補となるのは、西浦遺跡から1段下の低位段丘に展開するママ下遺跡・堂垣外遺跡が挙げられる。共に古墳時代後期後半の集落で、ママ下遺跡周辺は地名等から古代牧を想定する見解もある(宮澤 2002)。

今次調査では飯沼塚田古墳の本来の墳形や規模までは確認できなかつたが、金銅装馬具や鞍の存在などからみて、有力な人物(あるいは集団)が存在し、関東や東海と交流をもっていた可能性がある。後期後半まで土曾川右岸には有力な古墳の系譜は認められないことから、飯沼塚田古墳は当該期における新興勢力の台頭を示す遺構かもしれない。詳しくは今後の検討に委ねることとしたいが、地域内の動向や他地域との関係を解明するうえで、当古墳は重要な位置を占めることとなるだろう。

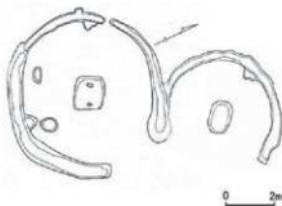
第2節 西浦遺跡の特徴と変遷

今次調査では、西浦遺跡が広がる段丘面の東端から中央付近までを調査した。地形的には、背後の段丘崖から天竜川の方へ突き出す、平坦化した尾根上にあるともいえる。これまでに縄文時代の遺構が存在することは知られていたが、今次調査によって、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が検出され、長きにわたり人の営みが行われてきたことが判明した。以下、時代別に成果をまとめ、土地利用の変遷を確認したい。

縄文時代 遺構はほとんど把握できなかったが、遺構検出面の精査中や縄文時代以降の遺構の掘削中に石器、土器等の遺物が若干ながら出土した。過去の旧上郷町教委による現・市道193号線の調査により、縄文時代の集落が把握されていることから、当該期の集落の中心は調査地北西側の段丘崖直下に位置し、今次調査区はその縁辺部にあたると考えられる。

弥生時代 集落に関しては、堅穴建物1棟を把握したにとどまる。年代は弥生時代後期後半の中島式の最終段階に位置づく。調査された建物は、段丘面の内側に立地する。居住域は段丘面の中央寄りに広がると想定できる。遺物としては、堅穴建物SI001から出土した有孔磨製石包丁が目立つ。2孔が穿たれる石包丁は、北信地域を中心に分布し、1孔が多数を占める当地方では稀少である。一方、平面形態は長方形に近く、石材に珪質片岩を用いる点は、当地域で一般的である。

周溝墓 弥生時代の墓域は周溝墓の分布から、段丘の内側にまで及ぶことが判明した。今次調査では、方形周溝墓4、円形周溝墓2が把握された。特筆すべきは円形周溝墓である。北信の千曲川流域で卓越する墓制で、当地域では飯田市上郷地区のミカド遺跡、伊賀良地区の殿原遺跡、喬木村の帰牛原遺跡および伊久間原遺跡、高森町の広庭遺跡で少数が確認されているにすぎない（小山 1999、山下 2001）。表6に挙げたとおり、当遺跡で新たに確認された2基は、飯田・下伊那で調査された円形周溝墓の中ではやや小型と思われるが、ミカド遺跡例のように周溝の一部を共有する（第41図）。しかし、依然として地域内では少数を占めるにとどまり、北信との交流の中で一部の集落にのみ導入された外的墓制としてとらえうる。



第41図 ミカド遺跡の円形周溝墓

対して、方形周溝墓は当地域で盛行する墓制である。出土遺物がきわめて少なく、時期ごとの変遷はとらえることができなかつたが、段丘端部と内側の双方で確認されたため、墓域の移動も考えられる。

古墳時代 後期後半に飯沼塚田古墳が築造された。古墳時代後期頃の堅穴建物としてSI003があり、西浦遺跡にも集落が存在していたようだが、造営主体としては段丘下にママ下遺跡や堂垣外遺跡など、候補となる有力な集落がある。

遺跡名	市町村	地区	遺構名	規模(m)	主体部(規模/形態)	時期	備考
西浦	飯田市	上郷	SZ089	?×(4.8)	?×1.0m 横円形土坑(SK092)	弥生後期?	094と周溝を一部共有
			SZ094	?×(4.2)	-	弥生後期?	089と周溝を一部共有
ミカド	飯田市	上郷	円形周溝墓1	6.8×6.5	1.4×1.2m 箱形木棺か	弥生後期?	2と周溝を一部共有
			円形周溝墓2	5.2×4.2	1.3×0.9m 横丸長方形土坑	弥生後期?	1と周溝を一部共有
殿原	飯田市	伊賀良	円形周溝墓1	3.9×3.6	1.6×1.0m 横丸長方形土坑	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
			円形周溝墓2	7.5×6.5	1.3×0.6m 不整長方形土坑	弥生後期?	弥生土器（中島式）出土
伊久間原	喬木村	-	円形周溝墓1	7.2×6.4	2.0×1.5m 横丸長方形土坑	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
			円形周溝墓2	7×6.5	-	弥生後期後半	弥生土器（中島式）出土
帰牛原	喬木村	-	II号(6号)円形周溝墓	7.1×6.8	2.0×1.0m 横丸長方形土坑	弥生後期?	弥生土器出土
			-	-	-	-	-

表6 飯田・下伊那における円形周溝墓一覧

豊富な副葬品からみて土曾川右岸の主要な後期古墳であり、中核的な墓のひとつとして評価できる。他に、天伯山1号・2号古墳も西浦遺跡と連続する尾根上にある。築造時期の特定はできないが、飯沼塚田古墳に先行する中期古墳の可能性があり、当地の墳墓の連続性を考えるうえで重要である。築造後、飯沼塚田古墳は7世紀末頃まで利用されたと考えられる。

平安時代 竪穴建物としてはSI002の1棟を把握したにとどまるが、SX031の埋土上層から灰釉陶器、縄釉陶器等の破片が多く出土した。平安時代にも当遺跡には集落が形成されており、陶器類は集落で使用されたものが古墳の周構内に投棄されたとみられる。SX031では古墳時代の遺物に混じって平安時代の遺物が出土しており、飯沼塚田古墳付近は平安時代後期に大きく変更を受けている。古墳に破壊が及んだ理由は定かではないが、平安時代末期までに成立していたという寄進地系莊園の郡戸庄に関わる開発行為も考えられる。

中世 遺構としては溝SD006を切り合いと埋土の特徴から当該期としたが、掘立柱建物や周辺のビックト群には中世と考えられるものが多く見受けられる。排土中や遺構検出中に陶器片が一定数出土したほか、青磁碗(49)の出土もあり、有力者の居住が推定される。

西浦遺跡における今次調査の大きな成果は、縄文時代から中世に至るまでの複合遺跡としての性格を新たに把握できたことにある。さらに、『下伊那史』で存在が指摘されていた古墳の再発見も予想に反する結果であった。段丘端部に形成された平坦面に立地する当地は、眼下に広がる生産域との地理的関係も良好で、長きにわたり人々が好んで生活の場所に選んできたことが改めて証明された。今後もリニア中央新幹線および長野県駅周辺整備に伴う発掘調査によって、周辺の遺跡の様相が一層明らかになり、集落間や墓域との関係も鮮明になると思われる。今後の歴史的評価の進展に期待する。

註

- (1) 鈴木敏則氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 伊藤 尚志 2005「第Ⅱ章 古代の土器」『恒川遺跡群 遺物編その1 古代・中世』飯田市教育委員会
- 城ヶ谷 和広・井上 喜久男 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投窯』愛知県
- 内山 敏行 1996 「古墳時代の轡・杏葉の編年」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 尾野 善裕 2000 「猿投窯(系)須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』、東海土器研究会
- 角脇 由香梨 2006 「古墳時代の須恵器生産 一東山古窯址群の特質をめぐってー」『きりん』第9号、荒木集成館友の会
- 小山 岳夫 1999 「弥生時代の円形周溝墓—弥生時代後期に長野県千曲川流域を中心に流行した円形周溝墓出現の意味ー」『信濃』第51巻第10号
- 高橋 透 2015 「6~7世紀のシナノにおける東海産須恵器の流通」『信濃大室積石塚古墳群の研究V 一大室谷支群ムジナゴーロ単位支群の調査—考察篇』 明治大学文学部考古学研究室
- 寺内 隆夫 1998 「弥生時代の土地利用」『更埴条理遺跡 屋代遺跡群—弥生・古墳時代編ー』(上)信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 一更埴市内その4ー)、諏訪長野県埋蔵文

化財センター

- 中村 新之介 2015「古墳時代北信における鉄鎌 一大室古墳群を中心に—」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅴ—大室谷支群ムジナゴーロ単位支群の調査—』考察編、明治大学文学部考古学研究室
- 平林 大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鎌の変遷」『物質文化』93 物質文化研究会
- 藤野 一之 2013「猿投産須恵器からみた古墳時代の地域間交流」『駒澤考古』38 駒澤大学考古学研究室
- 宮澤 恒之 2002「伊那郡衙周辺の馬牧情報 一上郷堂垣外遺跡を含む地名の検討一」『伊那』9月号、伊那史学会
- 宮代 栄一 1996「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 宮代 栄一 2016「群馬県高崎市觀音塚古墳出土馬具の再検討 一8組の馬装の復元とその性格一」『埼玉考古』51 埼玉考古学会
- 山下 誠一 1999「飯田・下伊那の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』99 シンポジウム発表要旨長野県考古学会弥生部会
- 山下 誠一 2001「飯田盆地における周溝墓の動向 一弥生時代から古墳時代における墓制の一様相一」『飯田市美術博物館研究紀要』11
- 山下 誠一 2004「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向 一発掘された堅穴住居址を基にして一」『飯田市美術博物館紀要』第14号

報告書

- 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『ナギジリ1号古墳』
- 飯田市教育委員会 1994 『堂垣外・橋爪・萩上・長橋遺跡』
- 飯田市教育委員会 2002 『久保田遺跡・久保田1号古墳・猿魔王塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2003 『ママ下遺跡』
- 喬木村教育委員会 1978 『伊久間原』
- 喬木村教育委員会 1982 『帰牛原遺跡群』
- 高森町教育委員会 1981 『瑞璃寺前・大島山東部・広庭遺跡』
- 上郷町教育委員会 1989 『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』小規模排水対策特別事業下黒田中部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 太宰府市教育委員会 1983 『大宰府条坊跡II』大宰府市の文化財第7集
- 栃木県教育委員会 1973 『下石橋愛宕塚古墳』

挿図出典

- 第38・40図 栃木県教育委員会 1973より引用、一部加筆
- 第39図 飯田市教育委員会 2002より引用
- 第41図 上郷町教育委員会 1989より引用、平面図2図を合成

付編 西浦遺跡から出土した雲珠の自然科学的調査

公益財団法人山梨文化財研究所 三浦 麻衣子

1 はじめに

飯田市西浦遺跡 SX031 から出土した雲珠について、材質と製作技法を把握することを目的として、蛍光 X 線分析による化学組成の測定とデジタルマイクロスコープによる表面状態の観察を行った結果を報告する。

調査前の目視観察では鉄地の表面に鍍金が施されているようにみえた。鉄には当時の鍍金技法であるアマルガム鍍金を直にできないため、鍍金ならば鉄地と金の間に銅が存在するはずである（鉄地金銅張り）。しかし、資料表面には鉄錆のみが存在した。鉄地金銅張りならば、腐食の過程で金よりも腐食しやすい鉄とともに銅の錆が資料表面を覆うことが多い。このことから製作技法については目視観察のみで把握することは難しい状況であった。

2 調査方法

蛍光 X 線分析については可搬型蛍光 X 線分析装置 (Innov-X Systems DELTA PREMIUM DP-4000) を使用し、非破壊で行った。分析モードは 2 Beam Mining Plus を使用し、タンタル管球の電圧を自動で 40kV と 15kV に切り替えて測定することにより塩素、硫黄、カルシウムなどの軽元素の分析も可能である。また、ファンダメンタルパラメーター法により簡易的ではあるが、各元素の半定量値を算出することが可能である。分析時間は 90 [sec] とし、X 線の照射範囲は直径約 10mm である。

デジタルマイクロスコープによる資料表面の観察には HIROX 製 RH-2000 を使用した。観察倍率は 35 倍である。

これらの調査は資料表面に形成された鉄錆を除去した後に行った。また、表面の金が良好に残存している箇所を選択して分析と観察を実施した。

3 結果と考察

蛍光 X 線分析の結果を図 1 と図 2 に示す。図 2 は図 1 の拡大である。強く検出した元素は鉄 (Fe)、金 (Au)、Cu (銅) である（図 1）。蛍光 X 線分析は資料表面の化学組成を測定する分析方法であるものの、今回は資料表面の金が非常に薄いことから、下層に存在する元素も同時に検出している。検出した元素のうち、鉄は鉄地、金は資料表面の金に由来するものと考えられる。銅は目視観察では見えなかったが、存在を確認できた。銅を検出したことにより鉄地金銅張りの可能性がある。この 3 元素の他には水銀 (Hg)、銀 (Ag)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca) も検出している（図 2）。水銀の検出はアマルガム鍍金が行われたことを示し、アマルガムを銅に塗布したのち加熱して水銀のみを蒸発させる工程で蒸発しきらなかったものであると考えられる。銀は鍍金に使用した金に含まれる不純物とみられる。ケイ素、カリウム、カルシウムは埋蔵環境下で付着した土に由来する。

デジタルマイクロスコープによる資料表面の状態を図 3 に示す。図 3 から資料表面には細かな傷が多く存在している。これは硬質の箋などで表面を磨いた擦痕である。アマルガム鍍金の工程で水銀を蒸発

させると表面にはアマルガム粒子が生成され、光沢がないため、表面を磨き輝かせることが必要となり、その結果が擦痕として残されている。

目視観察で銅錫を確認できなかったことから、本資料の製作技法は鉄地に接着剤を用いて金箔を貼る等の製作技法も想定されたが、蛍光X線分析で銅と水銀が検出されたこと、デジタルマイクロスコープによる観察で擦痕が確認されたことにより、鉄地金張り技法により製作されたものであることが明らかとなった。

主要参考文献

- 杉山晋作「金銅製品の再作技術」『古墳時代の研究 5 生産と流通 II』雄山閣 pp. 75-81 1991年
- 西山めぐみ「古墳時代耳環考—福岡平野出土耳環の材質・製作技法について—」『古文化談叢』第44集 九州古文化研究会 pp. 59-92 2000年

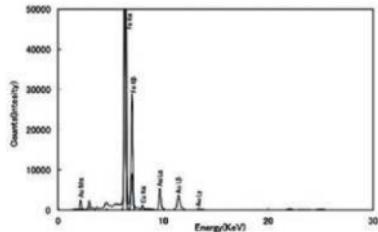


図1 蛍光X線スペクトル

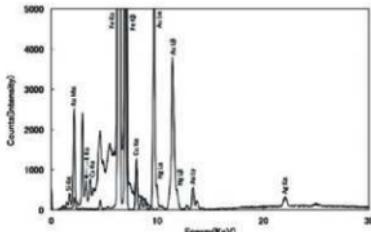


図2 蛍光X線スペクトル（拡大）



図3 簾金表面の状態



調査地遠景（矢印付近）



調査前（1・4 区付近）

写真図版 2



1区全景



同 柱穴内土器片検出状況



同 建物端の小穴列

写真図版 4



S1002



同 カマド



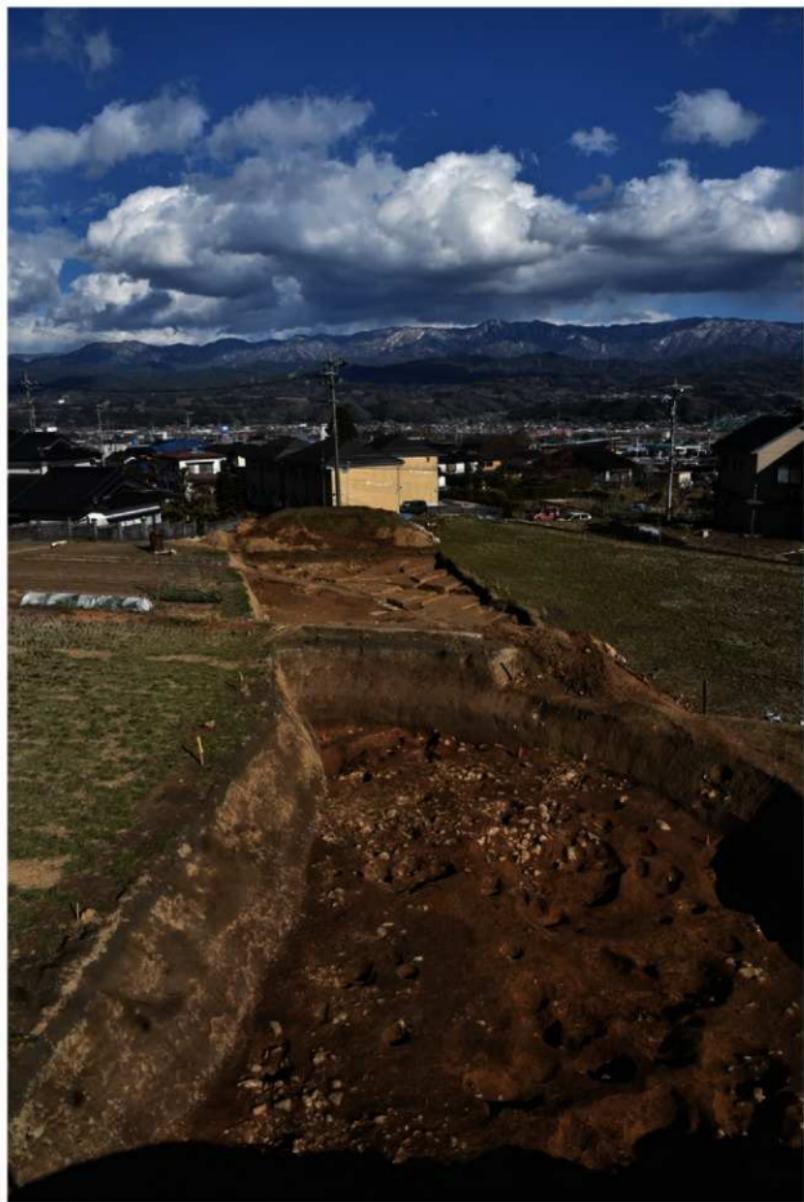
S1003



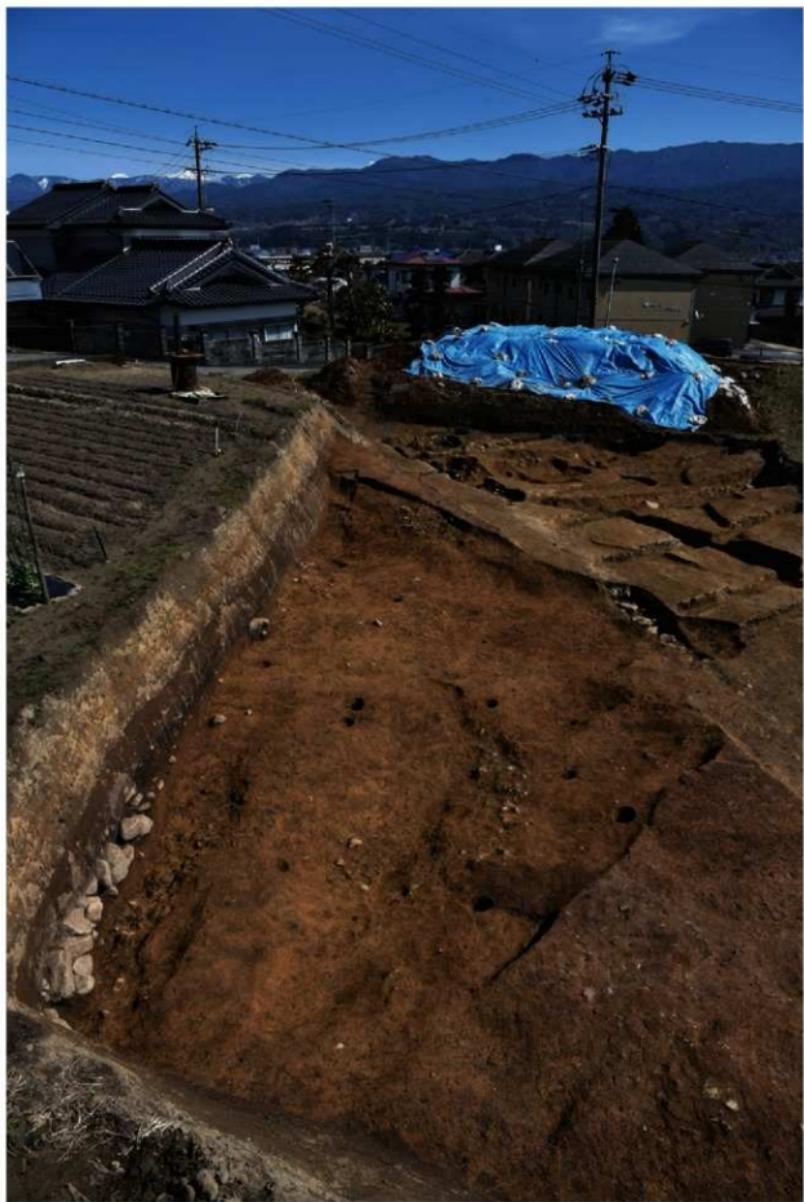
2区全景

※並行する溝群は擾乱（耕作溝）

写真図版 6



3・4区全景



SX031(西から)

写真図版 8



SX031(東から)



同 張り出し付近

※中央石列は近代以降の暗渠



SX031 巨礫検出状況



同 巨礫集中箇所 土層堆積状況



SX031 須恵器（壺）出土状況



同 馬具（鞍）・須恵器（平瓶）出土状況



同 馬具（雲珠）出土状況



SZ100・101

※並行する溝群は擾乱（耕作溝）



SZ100(D-D')・SZ101(A-A') 土層断面

写真図版 12



SX045 炭・焼土を含む砂土 検出状況

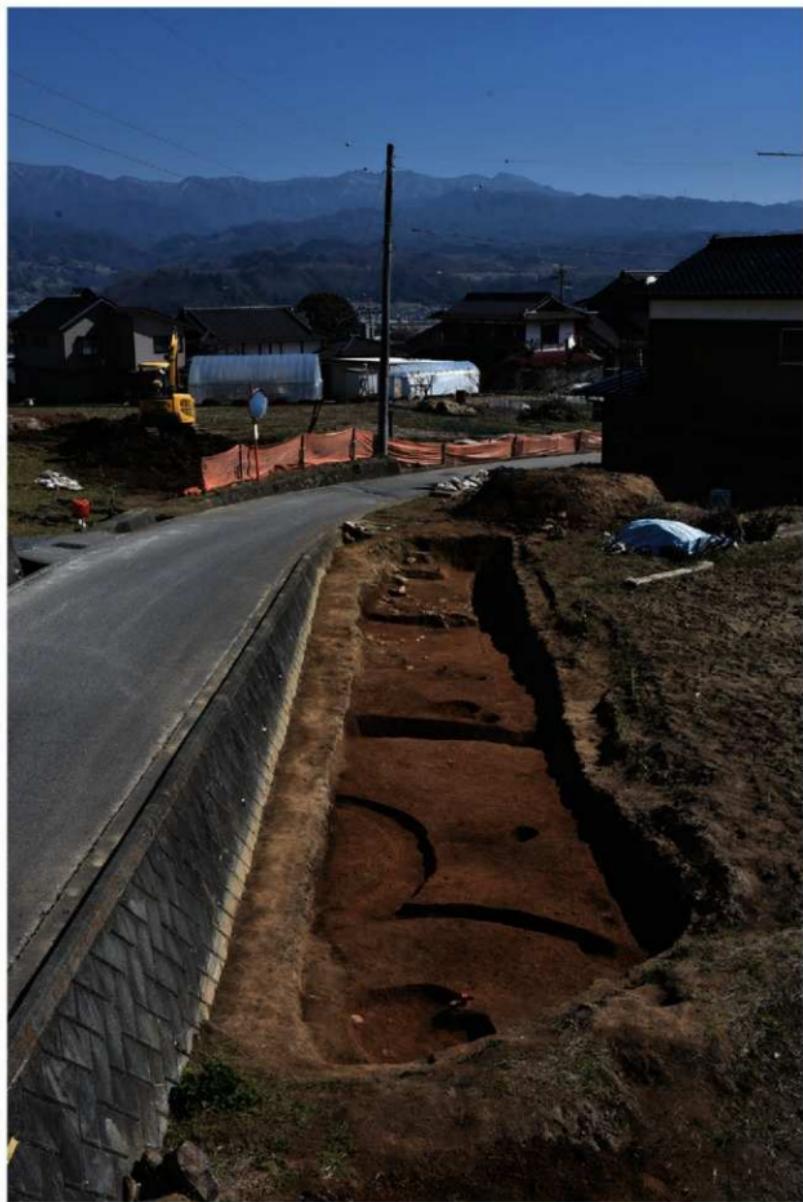


SX045 完掘



4区全景

写真図版 14



5 区全景



SZ103



SZ094



S1001 出土遺物・SX031 出土遺物 (1)



31



32

SX031 出土遺物 (2)



29



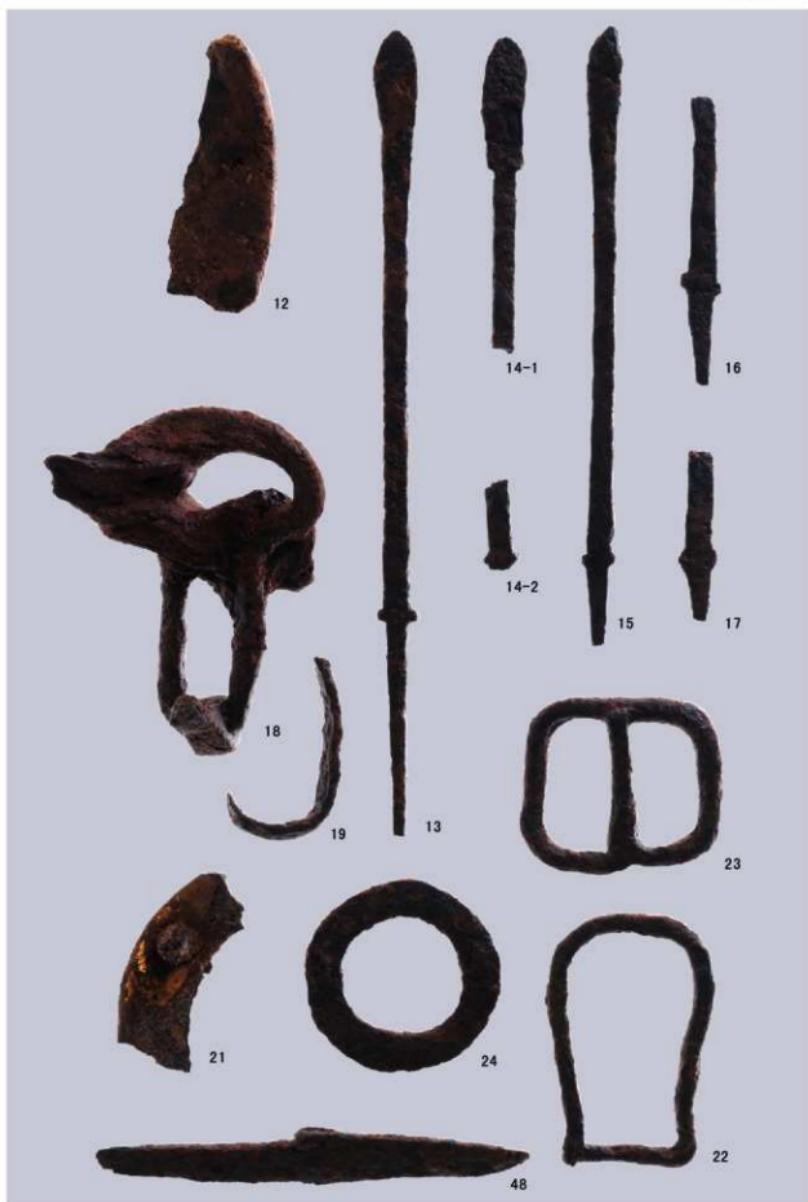
28



20



25



SX031 出土遺物 (4)・SP063 出土遺物

写真図版 20



33



34



37



43



46



47



50

報告書抄録

ふりがな	にしゅらいせき					
書名	西浦遺跡					
副書名	市道上郷35号線・483号線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2021年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
にしゅら いせき 西浦遺跡	いいだ しきみさといのま 飯田市上郷飯沼 2759番地1ほか	20205 221	35° 52' 83"	137° 85' 10"	2019/12/16 ～ 2020/03/19	660.17m ² 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
西浦遺跡	集落 その他の墓	弥生時代 古墳時代 平安時代	堅穴建物 3 大型遺構(古墳周溝) 1 掘立柱建物 1 周溝墓 6 土坑27 小穴多数	馬具(鞍、雲珠等) 鉄鎌、須恵器、切子玉、弥生土器、 石包丁、青磁	埋没古墳の発見	
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・埋没した古墳(飯沼塚田古墳)の周溝とみられる大型遺構から馬具(鞍、雲珠ほか)、鉄鎌、環状鉄製品、鉈具、切子玉、須恵器等が出土 ・弥生時代、古墳時代、平安時代の堅穴建物を各1棟、計3棟検出。弥生土器、有孔磨製石包丁、灰釉陶器等が出土 ・弥生時代の方形周溝墓4、円形周溝墓2基 ・中世とみられる溝・小穴群 					

西浦遺跡

2021年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

飯田市教育委員会

印刷・製本 有限会社飯田写真印刷